

Doc 1628

目次

第一卷 一九四一年（昭和十六年）一月 一九四一年（昭和十六年）十二月八日、

日本國軍備年表

	頁
一 緒 論	1
イ 概 要	1
(1) 戦前ノ「コタバル」偵察	1
(2) 特殊訓練計畫	1
(3) 全明的計畫	1
(4) 「本營ヲ讀ミサヘスレバ戦ハ勝ツ」	1
(5) 南海派遣軍ノ編成	1
(6) 「在南海將士ニ寄ル告示」	2
(7) 「グアム」攻撃ノ準備	2
(8) 「グアム」攻撃ヲ明記セル作戰命令	2
(9) 眞珠灣攻撃ノ準備	2
(10) 英領「マレー」攻撃ノ準備	2
(11) 「フィリッピン」群島攻撃ノ準備	3
(12) 戦争ヲ暗示スル公式發言	3
(13) 個人ニ依リ表明サレタ戦争切迫ノ認知	3
(14) 防空豫備工作	3
ロ 資料ノ構成	5

Doc 1628

三一九四一年 (昭和十六年) 一月	三一九四一年 (昭和十六年) 七月二十七日	四一九四一年 (昭和十六年) 九月一日	イ 圖上演習	三一九四一年十月	イ 戦争ノ噂トラツク島	六一九四一年十月十日	イ 上陸作戦準備	七一九四一年十月十二日	イ 「マレー」 作戦準備	八一九四一年十一月四日	イ ジヤングル 戦闘準備	六一九四一年十一月十日	六一九四一年十一月十五日	七一九四一年十一月十六日	七一九四一年十一月十八日	七一九四一年十一月二十二日	イ 機動部隊出航ス	七一九四一年十一月二十三日	イ 戦争勃發前ノ態勢	七一九四一年十一月二十六日	イ 眞珠灣攻撃	口 通常ノ航海ニ非ズ
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
3	4	4	4	2	1	12	12	12	12	12	12	13	15	17	17	18	18	18	18	18	18	19

二四	一九四一年	十二月	六日	ハ	戦線	「	グアム	」	島	20							
二三	一九四一年	十一月	二十七日	イ	機動部隊	途	達	路	圖	20							
二二	一九四一年	十一月	二十八日	ロ	機動部隊	單	冠	ヲ	發	ス							
二一	一九四一年	十一月	二十八日	ハ	攻撃	ヲ	通知	サル	20								
二〇	一九四一年	十一月	二十八日	イ	眞劍	ナ	空	氣	22								
一九	一九四一年	十一月	二十九日	ロ	「	サマ	」	ヨ	リ	「	マ	レ	」	ノ	攻	撃	22
一八	一九四一年	十一月	二十九日	イ	「	グ	ア	ム	」	島	攻	撃	22				
一七	一九四一年	十一月	二十九日	ロ	「	グ	ア	ム	」	島	ニ	テ	敵	ト	遭	遇	23
一六	一九四一年	十一月	二十九日	ハ	「	タ	ロ	」	灣	ニ	上	陸	23				
一五	一九四一年	十一月	二十九日	ニ	休	戦	ノ	取	リ	消	シ	23					
一四	一九四一年	十二月	一日	イ	砲	撃	計	24									
一三	一九四一年	十二月	二日	イ	日	本	戦	争	ヲ	決	定	ス	24				
一二	一九四一年	十二月	三日	ロ	比	島	上	陸	24								
一一	一九四一年	十二月	四日	イ	敵	機	ヲ	擊	墜	ス	24						
一〇	一九四一年	十二月	五日	二	三	28											
〇九	一九四一年	十二月	六日	二	四	28											

- 三一 潜水艦ニ依ル戦前ノ眞珠灣偵察 34
- イ 攻撃前ニ偵察ス 34
- 三二 日本情報機關ノ評價セル戦争勃發前ノ「フィリッピン」
群島ノ米軍兵力 34
- イ 米國ノ實力——「フィリッピン」群島 34
- 三三 蘭領東印度ニ於ケル戦前間諜行爲 35
- イ 一九三五—一九四〇（四一）年マデノ蘭領東印度防衛
兵力 35
- （昭和十五（十六）年）ヲ示ス略圖 35
- ロ 「スマトラ」住民ノ新生活 39
- ハ 蘭領東印度ニ於ケル日本將校 39
- 三四 「ニューギニア」ニ於ケル戦前ノ間諜行爲 39
- 三 五 濠洲ニ於ケル戦前ノ間諜行爲 42
- イ 濠洲軍ノ配備ヲ示ス略圖 42
- 三 六 朝鮮ニ於ケル防諜對策 47

第四章 軍事的意義ヲ有スル出版物

- 三七 概 要 49
- 三八 出版物一覽表 49
- イ 蘭領東印度ノ兵要地誌 49
- ロ 「ジャヴァ」及「ボルネオ」地圖 49
- ハ 熱地ニ於ケル給與 49
- ニ 航空勤務員ノ急速訓練 49

Doc 1623

11.

日本ノ未來ノ寶庫	49
「大東亞共榮圈及大平洋」ノ	
印刷地圖	49
ト道路敷設圖	49
ト海南島	49
チ英軍兵器便覽	50
リ軍事施設圖	50
シンガポール	50
又歩兵野戰築城教範	50
ル上陸作戰心構	50
ヲ船長ニ對スル訓練	50
ヲ南方諸國ノ航空機	50
カ聯合國飛行機ノ識別	50
ヨ米軍戰術	50
タ日本語	50
マレ	50
ト語彙	50
レ熱地衛生便覽	50
ソ熱地醫療心構	50
第五章 結 論	50
附錄 Δ 日本ノ戦争準備ニ關スル日誌	
一九四一年十月十日	52
十二月七日	52
B 眞珠灣攻撃ニ關スル質問書	
ニ對スル回答	66

第一障 日本國軍備年表、一九四一年一月—一九四一年八月

一、緒論
イ、概要

日本ノ「大東亞戦争」準備ハ事實上一九四一年十二月八日ノ戦争勃發ヨリモ遙ニ先立ツモノデア
ル。此等ノ準備ヲ證據ヅケル有効ナ参考書類ハ未
ダ断片的デ、一九四一年夏及ビ秋ヲ通シテ行ハレ
タト云ハレル熱帯戦闘ノ特別訓練作戦ニ就イテハ
特ニソウデアアル。併シナカラ戦争状態開始ノ日ガ
近ヅクニツレテ、適切ナ参考物ガ一層豊富トナリ、
一九四一年ノ十一月迄ノ日本國軍備ノ可成リ包括
的ナ畫像ヲツナギ合セル事ガ出來ル。今日（一九
四五年一月一日）迄ニ確證セラレタ此等ノ準備ノ
主ナル概観ハ次ノ如クデアアル。

(1) 戦前ノ「コタ・バル」偵察—早クモ一九四一年
一月ニハ横須賀海軍航空隊ノ遠征軍ハ「コタ・バ
ル」ノ東北「マレー」海岸ノ準備的航空寫眞ヲ撮
影シタ。コノ地點ハ丁度一九四一年十二月八日ニ日
本軍ガ上陸シタ地區デアツタ。一九四一年七月迄
ニハ水路部ハ同地區ノ必要ナ補足地圖ノ製作ヲシ
テキタ。此等ノ測量カラ綜合シタ資料ニ基キ、軍
令部ハ一九四一年十月ニ、二萬八千分ノ「コ

タ・バル」及び附近ノ詳細地圖ヲ發行シタ。此地
 圖ニハ航海上ノ指示、測深資料及び沿岸偵察ノ結
 果ガ丹念ニ註解シテアル。トーチカ、鐵條網及び
 飛行場施設ノ位置モ又記録サレテキル。(下記第
 二項、參照)

(2) 特別訓練計畫一部隊ノ公式報告ハ、一九四一年
 七月二十七日ヨリ十二月七日ニ至ル間、一九四一
 年十月十二日ヨリ十一月十四日ニ至ル間、及び一
 九四一年十月十日ヨリ十二月八日ニ至ル間等ノ諸期間ハ
 「フイリツピン」作戰「マレー」作戰及び大東亞
 戰爭ニ伴フ諸上陸作戰ノ準備ニ當テラレタト述ベ
 テキル。此ノ訓練ヲ受ケタ部隊ハ夫々滿洲、上海
 附近及び「パラオ」ニ駐屯シテキタ。

(3) 全面的計畫、——一九四一年八月中ニ極メテ多
 クノ圖上演習ヲ日本海軍ガ行ツタ。一九四一年九月
 二日ヨリ十三日ノ間、最後ノ圖上演習ガ東京ノ海
 軍大學デ、多數ノ高級海軍將校ガ參加シテ開カレ
 タ。課題ハ二ツデアツタ。即チ、一ツハ海軍ノ眞
 珠灣空襲ノ詳細ナル計畫ノ作戰、第二ハ「マレー」
 「ビルマ」、蘭領印度、「フイリツピン」群島、
 「ソロモン」群島及び中部大平洋諸島(含布哇)
 ノ占領作戰ノ計畫ノ樹立。此等ノ問題ニ就テ研究
 サレタ狀況ノ概略ハソノマ、實際ノ攻撃ノ詳細ヲ

Doc 1625

示ス將來ノ命令ノ本質ヲ作ツタ。

一九四一年十一月一日迄ニ機密聯合總隊命令作第一號ノ最後案ガ承認サレ、印刷ガ始メラレタ。命令ハ、其附屬書ト共ニ眞珠灣、及ビ諸所ノ英、米、蘭領ノ攻撃ノ計畫及ビ豫定ヲ詳細ニ述ベテキタ。此命令ハY日ヨリ有效ニナル事ニナツテキタ。戰爭ハX日ニ布告サレル事ニナツテキタ。機密聯合總隊命令作第二及第三號ハ此等ヲ夫々十一月二十三日及ビ十二月八日ト指示シタ。(全面的計畫ノ詳細ハ下記第四項參照)

(4)「本誓ヲ讀ミサヘスレバ戰ハ勝ツ。」一九四一年十一月十日迄ニ「本誓ヲ讀ミサヘスレバ戰ハ勝ツ」ト題シタ小冊子ヲ第五十五師團歩兵部隊ガ受ケ取ツテキタ。主題ハ合衆國、英國、及ビ和蘭トノ戰爭ノ緊迫ヲ明ニ豫告シタモノデアアル。(下記第九項參照)此ノ寫シガ海外ヘノ上船前ニ各日本兵士ニ配布サレタ。此小冊子ノ發行ノ日附ハハツキリ分ラナイガ、ソノ長サ及ビ内容ノ性質ハ十一月十日ヨリ可成リ以前ニ於ケル基礎的準備ヲ指示スル様ナモノデアアル。

(5)南海派遣軍ノ編成一意味アリゲニ名付ケラレタ南海派遣軍ハ少クトモ紙ノ上デハ一九四一年十一月十五日迄ニ既ニ編成サレテキタ。其ハ十二月十

- 日ニ「グワム」ヲ取り、後ニ「ラボウル」及ビ「ニュー・ギニヤ」ニ移動シタ部隊カラ成ツテキタ。
- (6)「南海將士ニ寄スル告示」十一月十五日ニ、南海派遣軍指揮官堀井富太郎少將ハ彼ノ指揮下ノ全員ニ宛テタ「南海將士ニ寄スル告示」ヲ出シタ。本告示ハ極メテ明確ニ戦争ノ來ル事ヲ豫言シテキル。勃發ノ日付ハ述ベテキナイガ、併シ通知ノ主旨ハ戰ノ前夜ニ於ケル指揮官ノソノ軍隊ニ對スルモノデアツタ。(下記第十項、參照)
- (7)「グワム」攻撃ノ準備―新編南海派遣軍ノ若干ノ要員ハ早クモ一九四一年十一月十四日ニ日本國內ノ準備基地ニ向ツテキタ。例ヘバ第四十七高射砲聯隊ノ一部ハ滿洲ノ駐屯地ヲ出發シ、北四國ノ坂出ニ釜山、宇品ヲ經テ輸送サレタ。南方派遣軍大部分ハ其處ニ集結シタモノト思ハレル。十一月二十二日、二十三日及二十四日ニ、諸種ノ部隊ハ上船シ、小笠原諸島ニ向ケ出發シタ。輸送船ハ一九四一年十一月二十七日ニ目的地ニ到着シタ。或ルモノハ母島ヘノ途中父島ニ一寸寄港シタ。母島デ軍隊ハ休息シ、又訓練シタ。十二月四日ニ輸送船團ハ「グワム」攻撃ヲ實施スル爲出帆シタ。
- (8)「グワム」攻撃ヲ明記スル作戰命令―一九四一

年十一月二十九日十五時、第五十五艦隊第二中隊長崎河中尉ハ崎作戰命令第二號ヲ發シタ。此ハ一部ニ「派遣軍ハ「グワム」ヲ攻撃スル」ト書イテキタ。

(9) 眞珠灣攻撃ノ準備ト眞珠灣攻撃ノ準備ガーツノ公式地圖及ビ作戰ニ參加シタ四人ノ俘虜ノ試問ニヨリ再ビ組ミ立テラレタ。後者ノ説明ハ日付ニ付キ多少喰ヒ違ヒガアルカ、次ノ決定ハ本質的ニ正確ナモノト思ハレル。

航空母艦加賀ハ佐世保ヲ一九四一年十一月十五日若シクハ同日頃、千島列島襟提島ノ單冠（ヒトカツプ）灣ニ機動部隊ノ他ノモノト集結ノ爲出發シタ。ソレハ其所ニ十一月二十三日頃到着シタ。

第十八水雷戰隊ハ十一月十五日ニ横須賀ヲ出發シ、十一月二十一日ニ單冠灣ニ到着シタ。航空母艦翔鶴ハ十一月二十日ニ大分ヲ出港シ單冠ニ十一月二十五日若シクハ同日頃到着シタ。機動部隊ヲ構成スル他ノ艦艇ノ日本出發ノ日付ハ分ラナイカ、併シ十一月二十二日カラ二十五日ノ間ニ、二隻ノ戰艦ト霧島及ビ比叡、六隻ノ航空母艦ト加賀、翔鶴、瑞鶴、赤城、飛龍、及ビ蒼龍、重巡洋艦、利根、及ビ筑摩、並ニ輕巡洋艦、阿武隈、不知火、霞、霞及ビ陽炎ヨリナル第十八驅逐隊、並ニ隴、陽炎及ビ不知火諸者註原文通りヲ會

ム四隻ノ第十六驅逐隊カヒトカツプ灣ニ集結シタ。
十一月二十六日又ハ二十七日ニ、機動部隊ハ出港
シタ。三隻ノ「伊」號潜水艦ガ港外デソレニ加ツ
タ。機動部隊ハ西徑一七八度マデ東ニ進ミ、ソレ
カラ布哇ニ向ヒ東南ニ進路ヲ轉シタ。飛行機ハ東
京時間十二月八日ノ〇一乃至〇二時頃發進シタ。
(D) 英領マレー攻撃ノ準備ハ英領マレーニ對スル攻
撃ノ準備ハ同作戰ニ參加シタ第四十一歩兵聯隊、
第一〇六陸上勤務中隊、佐世保第五特別海軍陸戰
隊、及第七七航空聯隊ヨリ得タ公式文書及ビ日
記ニヨリ一部分再建サレタ。左ノ敘述ハ本質的ニ
正確ナルモノト思ハレル。

18
一九四一年十一月十七日、上海附近ニ少クトモ
十月初旬ヨリ駐屯シ、マレー作戰ノ訓練ヲシテキ
タ第四一歩兵聯隊(上記第一項(1)(2)参照)ハ彼等
ノ「戰地」へノ出發ノ名譽ノ爲ニ閱兵ト祝賀ヲ行
ツタ。十一月十八日ニ聯隊ノ一部ハ龍城丸ニ乘リ
海南島ノ南岸ノ「サマ」ノ集結地點ニ向ヒ出發シ
タ。一員ノ日記ハ十一月十八日ノ日付デ次ノ記載
ヲ含ンデキタ。「——」命令ハ遂ニ到着シタ。行
動ヲ示スベキ時ガ遂ニ來タ。我々ハA、B及ビD
ト戰爭セントスルノカ。「十一月二十一日ニ龍城

丸ハ高雄ニ投錨シタ。「サマ」到着ノ日附ハ分ラ
 ナイガ、併シ第四一步兵聯隊ノ他ノ要員ハ十一月
 二十日迄ニ海南島海口ニ到着シタ。同日更ニ第四
 一步兵聯隊ノ其ノ他ノ要員ガ青葉山丸ニ乗船シ、
 十一月二十一日乃至二十二日ニ吳淞カラ「サマ」
 ニ出帆シタ。第一〇六陸上勤務部隊ノ一部ハ床川
 丸ニ乗り十一月二十三日西貢ヲ出港シ、十一月二
 十五日「サマ」ニ到着シタ。十一月二十五日ニ又、
 佐世保第五特別陸戰隊ノ要員ハ、「バラオ」ニ向
 フ途中、進路ヲ變ジ「サマ」ニ向フ様命ゼラレタ。
 第一〇六陸上勤務中隊ノ第二部ハ西貢デ十一月二
 十七日ニ大海丸ニ乗り、十二月一日海南島ニ到着
 シタ。十二月三日、第七七航空聯隊ノ二ヶ戰隊ハ
 「サマ」ノ防空ニ當ル第七〇飛行場中隊ニ協カス
 ル様命ゼラレタ。十二月四日迄ニ、集合ハ完了シ
 タ。十二月四日乃至五日ニ、輸送船團ハ「マレー」
 ニ向ケ出帆シタ。

(11)「ファイリツピン」諸島攻撃ノ準備、一「ファイリ
 ツピン」諸島攻撃ノ準備ニ關スル有效ナ證據ハ少
 イガ然シ乍ラ田中分遣隊ガ一九四一年ノ昭和十六
 年ノ十一月二十三日ヨリ二十五日ノ間臺灣高雄ニ
 於テ乗船シタトイフコトハ確カナコトデアル。十

一月二十六日田中分遣隊ハ第十四軍司令官デアリ「フイリツピン」作戰ノ指揮官本間雅晴中將ノ直接指揮ノ下ニ入ツタノデアル。十一月二十五日ヨリ十二月七日ノ間田中分遣隊ハ澎湖島ノ馬公海軍々港ニ向ツテ高雄ヲ出發シタ。同隊ハ「ルソン」北方「アパリ」ヲ攻撃スル爲十七時ニ出發シタ日即チ十二月七日マデ同所ニ駐屯シテ居タノデアル。(12) 戦争ヲ暗示スル公式發言一十一月十六日及二十一日ニ夫々、重巡洋艦加古並ビニ輕巡洋艦香取ノ艦長等ハ戦争ノ近迫セルヲ乘組員ニ判然トシタ言辭ヲ用ヒテ話シタノデアル。(第一一節及下記一五節(口)参照)二十六日ニハ又海軍中將南雲忠一ハ單冠灣ニ集結シタ機動部隊要員ノ若干ニ彼等ハ眞珠灣ヲ攻撃スルコトニナツテ居ル事ヲ知ラセタノデアアル。

(13) 個人ニ依ツテ表明サレタ戦争切迫ノ覺知一色々ノ人ガ戦争切迫ノ豫知ヤ疑念ヲ表明シタ。是ガ信ズベキ筋カラ得タ情報ニ基クモノカソレトモ噂ヤ世間話カラ來タモノカハ或ル場合ニハハツキリシナイ、然シ乍ラ早クモ昭和十六年十月ニ「トラツク」デ、昭和十六年十二月二十五日カラ翌十七年二月一日迄ノ間ニ米國ト戦争ガ始マルト云フ噂ガ廣マツタ、十一月十八日第四十一歩兵聯隊ノ或者

ハA B D三國ト近ク戦争ガ始マルデアラウト論評
 シタ。十一月二十六日南洋派遣軍第四十四歩兵聯
 隊ノ或者ハ「我々ガ戦フ所ハ「グワム」島デアラ
 ウ」ト誓イテ居ル、南洋派遣軍ノ他ノ二人モ十一
 月二十九日ニ同様ニ戦争ガ切迫シテ居ルト云フコ
 トヲ表明シタ。

十二月二日カラ七日迄ノ間ニ、十二月八日ニ戰
 争開始ノ豫定デアルコトハ攻撃部隊ノ間ニ全ク知
 レ渡ツテ居タ、十二月二日航空母艦加賀ノ艦長ハ
 乗組員ニ對シ十二月八日ニ戦争ガ開始サレルデア
 ラウト告示シタ、十二月四日南洋派遣軍總司令官
 堀井富太郎ノ音譯ノ陸軍少將ハ日本帝國ハ米國英
 國及ビ和蘭ニ對シ宣戰スルコトニ昭和十六年十二
 月二日決定シタト云フ趣旨ノ正式聲明ヲ發シタ（
 下記十七ノ（イ）二十ノ（イ）及ビ二十二各節參照）以後
 彼等ノ目的ハ南洋派遣軍ノ間ニ實ノ知レ渡ツタ様
 デアル。馬來作戰ノ爲ニサマニ集結シタ部隊ノ間
 ニ同様知レ渡ツタト云フ證據ハ乏イガ彼等ノ目的
 地ハ或ル程度分ツテ居タ様デアル。

(14) 防空豫備工作ト十二月一日及三日基隆及「サマ」
 ノ防空ニ對スル命令ガ第四十八野戰防空大隊及第
 七十七航空隊ニ依ツテ夫々出サレタ。此等ハ明カ

ニ敵ノ空襲ノ可能性ヲ豫期シタモノデアアル。
(ロ)資料ノ構成

前述ノ概略ノ基トナツテ后ル證據ハ左記ノ各項ニ
詳細ニ述ベテアル。参考事項ハ、日誌其他檢査ノ
下ニアル捕獲書類内ノ最モ重大ナ記事ノ日附ニ從
ツテ年代順ニ配列サレテアル。

日本軍備順序ヲ更ニ明カニスルタメ十月十日ヨ
リ十二月七日ノ期間ノ重要ナ行動ヲ日々ニ行ツタ
コトヲ述ベテアル表ハ附録Aトシテ記載サレテア
ル。

二、一九四一年ノ昭和十六年ノ一月「英領馬來東海
岸航空軍用地圖第一部」ナル「コタバル」及其ノ
附近ヲ記載スル註釋附地圖ノ翻譯ハ同地域ニ於ケ
ル上陸作戰ノ適切ナル資料ヲ示スモノデアアル。「
コタバル」ハ英領馬來デ日本軍ガ初メテ上陸シタ
所デアツタ。此ノ詳細地圖ハ一九四一年ノ昭和十
六年ノ十月軍令部ガ作ツタモノデアアル。同地圖ノ
基トナツタ航空寫眞ハ一九四一年ノ昭和十六年ノ
一月中ニ取ラレ一方水路部ニ依ル追加的地圖作製
ガ一九四一年ノ昭和十六年ノ七月完成シタコトハ
注目ノ價值ガアル。

三、一九四一年ノ昭和十六年ノ七月二十七日
イ、「比島」作戰準備

Doc 1628

一九四四年／昭和十九年／三月二十六日附第四陸軍航空兵隊命令第十二號ノ拔萃ハ次ノ如ク誓イテアル。

「軍曹後藤武夫（宛テ字）ノ死亡證明及兵役記録部隊 一第二十五飲料水淨化隊

徴兵年 一 一九三九年／昭和十四年／一一一一

兵役、一九四一年／昭和十六年／七月二十七日

ヨリ一九四一年／昭和十六年／十二月七日ノ間

一滿洲國境防備及「比島」作戰準備」

聯合軍翻譯通譯部公報第一〇六〇號、一〇頁）

四、一九四一年／昭和十六年／九月二日

イ、圖上演習

日本軍航空機ガ一九四一年（昭和十六年）十二月七日眞珠灣ニ集結セル合衆國ノ艦隊及ビ航空機ヲ攻撃シタ時敵ハ數ヶ月以前ニ考究サレ長ク秘密ニシテ居タ説イ計畫ヲ實行シタ。

最近ニ至ル迄布陸ヘノ卑劣ナ襲撃ニ先立ツテノ計畫段階ニ付テハ少シモ知ラレテ居ナカッタ、敵ノ初期ノ意圖ノ最初ノ具體的ナ暗示一九四一年（昭和十六年）ノ中頃ノ急迫セル數ヶ月間日本海軍ノ最高幹部ノ下ニアツテ勤務シテ居ター主計兵曹ノ訊問ノ中ニ表示サレテ居ル、「サイパン」ヲ捕ヘ

ラレタ此ノ捕虜ハ眞珠灣ニ對スル計畫ガ完成サレ
ツ、アル時軍上層部ノ情報ト共ニ軍機ノ警頭ニ接
近スルコトガ出來タ。

捕虜ハ非常ニ記憶力ガヨク又協同的態度ヲ持シテ
居タ他ノ據所カラ待タ確實ニ證言ト正確ニ合致シ
戰術上ノ報告（「週聞情報」第一卷第二第二號ニ
アル如キ）ハ確實デアルト云フ事ガ分ツタ（A.F.I
S、R.R第一三二號眞珠灣作戰參照）此ノ捕虜
ニ就テ注目スベキコトハ一九四一年（昭和十六年）
十一月一日附ノ歴史的小機密聯合艦隊命令作第一
號ニ付テ記憶ヲ辿リ乍ラ舊イタ記事中心ニ示サレテ
居ル如キ細目ニ亘ツテノ彼ノ記憶力デアアル
記憶ニ依テ殆ンド再作成サレタ此ノ文書ハカナリ
正確ニ書カレテ居ルト信シラレ此ノ章ノ後ノ方ニ
其ノ全文ヲ掲ゲル

聯合艦隊司令部附（山本海軍大將）ノ一主計兵ト
シテコノ捕虜ハ日本ノ國上演習ヲヨク知ル様ニナ
ツタ日本ノ各艦隊ノ幕僚ハコレ等國上演習ヲ一枚
ノ廣イ計畫板ノ上テ行ツタ。國上演習ハ屢々行ハ
レ時ニハ一月ニ二度モ行ハレタ。

八月下旬（一九四一年ノ昭和十六年ノ）ニ先ダツ
テ國上演習ハ宿毛、佐伯、鹿兒島、鹿屋等ノ諸地

デ行ハレタ。在意大利ノ中心ハ圖上演習ノ目的トシテ採リ上ゲラレタ戦略ノ中デ專ラ當面ノ實驗的資料ニ注カレタ。

之等圖上演習中ニ特別ニソノ敵國ノ名前ハ判然ト指示サレナカッタト捕虜ハ強調シテ居ルガ日本ノ敵トナル可能性ノアツタ國々ノ本体ハ明白デアッタ。

此ノ期間中絶エズ聯合艦隊司令部及ビ軍令部トノ間ニ人員ノ異動カ行ハレタト捕虜ハ加ヘタ。

之等ノ軍令部ニ勤務シテキタ幕僚ハ遙ニ他ノ艦隊ノ參謀ヨリモ優秀デアツタト云ハレテ居ル、最終計畫段階ハ八月下旬ニ豫告サレソノ時聯合艦隊司令長官ハ全艦隊司令長官及ビ彼等ノ主要幕僚ニ更ニ東京デ圖上演習ヲ行フ事ヲ命令シタ。

日本ノ首都ニアル軍令部内事務所ハ不適當ダト云フコトニナツテ圖上演習ハ以後海軍大學校デ行ハレタ。

捕虜ハ六學校ニ於ケル防諜手段ハ非信ニ不十分デアツタト言明シ學校ノ授業ハ相變ラズ續ケラレト雖デモ官吏ラシイ風ヲスレバ中ニ入ルコトガ出來タニ違ヒナカッタト語ツタ。

九月二日ニ最後ノ最モ重要ナ圖上演習ガ行ハレソレニ參加スル士官ニ對スル開會ノ演習ガアツタ、

室ハN組A組E組（日本米國英國）ト審判員トニ
 ワケラレタ。參加員ハ事實上日本海軍ノ最高首腦
 部ニヨツテ組織サレタ次ノ人々デアツタ。
 審判人

海軍々令部 階級 職 務

永野修身 海軍大將

福留茂 海軍少將 第一課長（戰爭計畫及作戰）

魚住次作 海軍大佐 第一課々員

山本親雄 海軍大佐 第一課分課長

黛治男 海軍中佐 第一課分課員

田村三郎 海軍中佐

佐藤毅 海軍中佐

魚住頼一 海軍中佐

海軍省 高田敏雄 海軍大佐 軍務局第一課長

志岐常雄 海軍中佐 軍務局員

藤井茂 海軍中佐 軍務局員

（嶋田繁太郎海軍大將）

N組

聯合艦隊

山本五十六 海軍大將 聯合艦隊司令長官

伊藤整一 海軍少將 參謀長

Dec 1628

27

黒島 龜人 海軍大佐 首席參謀

後藤 茂 海軍中佐 副官

磯部 太郎 海軍中佐 機關參謀

杉 藤馬 海軍中佐 砲術參謀

佐々木 彰 海軍中佐 航空參謀

和田 雄四郎 海軍中佐 通信參謀

永田 茂 海軍中佐 航海參謀

渡邊 安次 海軍中佐 戰務參謀

有馬 高泰 海軍中佐 水雷參謀

市吉 聖美 海軍中佐 補給參謀

太田 香苗 海軍中佐 氣象長

第一聯合通信隊 (無線情報)

柿本 權一郎 海軍少將 司令官

有澤 直定 海軍中佐 首席參謀

B組

第二艦隊

近藤 信竹 海軍大將 司令長官

柳澤 藏之助 海軍大佐 首席參謀

大石 保 海軍大佐 航海參謀

第四艦隊

井上 成美 海軍中將 司令長官

第五艦隊

細ヶ谷 萱子郎 海軍中將 司令長官

第十一航空艦隊

28

Doc 1628

A 組
 塚原 二四三 海軍中將 司令長官
 草鹿 任一 海軍少將 參謀長

第三艦隊 (南方水陸攻撃部隊)

高橋 伊望 海軍中將 司令長官
 石原 肇 海軍大佐 參謀長

第六艦隊

清水 光美 海軍中將 司令長官
 鹿岡 友次郎 海軍大佐 參謀長

第一航空艦隊 (空母艦隊)

南雲 忠一 海軍中將 司令長官
 草鹿 龍之助 海軍少將 參謀長
 源田 實 海軍中佐 首席參謀

九月三日以係將校ハ分級シタ資料ヲ研究シタ。
 俘虜ハⅡ組（聯合艦隊司令長官）ニ配屬サレタ。
 當日午後渡邊中佐一山本大將幕下ノ勤勉デ慧眼ナ
 作戦計畫參謀ハ俘虜ニ圖上演習ヲ實施スル狀況ヲ
 要ノ原稿ヲ手渡シ五十部ノ複寫ヲシタ。同演習
 ノ實施遲延ヲ規定スル、コノ條件ニハ、來ルベキ
 十一月一日附ノ作命令第一號ノ骨子カ含マレテキ
 タ。廣汎ナ準備計畫ガ裏書サレテイダ。俘虜ハコ
 レヲノ計畫ハ該ケ月ニ亘ツテ研允サレタモノニ違
 ナイト信ジタ。此ノ時始メテ俘虜ハ何カ非常ニ重
 大ナ事ガアリソウチ事ヲ知ツタ。

九月五日俘虜ハ聯合艦隊司令長官幕下ノ航空參
 謀佐々木中佐ノ直屬ニナツタ。十時頃紫煙ノ立チ
 コメタ部屋ニ入ツタ時、彼ハ眞珠灣計畫ガ討議サ
 レテキルノヲ知ツタ。日本軍ハ明カニ眞珠灣内デ
 太平洋ニ於ケル米國ノ主要艦隊全部ト最近大西洋
 ヨリ廻航サレタト言ジラレル艦隊ヲ捕捉セントネ
 ラツテキタ。俘虜ハⅡ組ハ布哇攻撃ニ参加スル部
 隊ノ三分ノ一ヲ失フ豫想ヲ洩レ聞イテ驚イタ。擧
 沈サレルモノト見做サレタ軍艦ハ赤城級空母一隻
 及蒼龍級空母一隻デアツタ。

九月六日及び七日ニN組デハ眞珠灣攻撃ノ最善ノ方法ヲ討議シタ。〔算盤〕計算盤ニ巧ナ俘虜ハ此等ノ會議中種々ノ速力デ艦隊ノ使用スル燃料ヲ計算スル爲ニ幾回モ使ハレタ。黒島海軍大佐（首席參謀）ト伊藤海軍少將（參謀長）ガ布哇ニ對スル水陸兩面攻撃實施ノ可能性ニ就キ意見ヲ異ニシタノハ計畫中此ノ時デアツタ。冷靜ニシテ正確ナ伊藤ハ（意外ニモ）早期上陸作戰遂行ヲ主張シ山本モ同意ノ傾向デアツタガ直線的デモイ氣度ノ黒島ハ如何トモスバカラザル補給問題ヲ指摘シテ討議ニ勝利ヲ得タ。俘虜ハ伊藤案ハ其後ノ降参ノ咄囃ノ愚付デアリ、黒島ノ議論ガ勝ヲシメタノデ善後案ハ元ノ計畫通りデ更サレナカツタト信ジテ居ル。

俘虜ノ言ニ依レバ、此等初期ノ會議ハ主トシテ二ツノ一般的問題即チ

(一) 眞珠灣ニ對スル奇襲的空襲ヲ成功サセル爲ノ細項ト

(二) 馬來、緬甸、蘭領東印度、比律賓群島、ソロモン群島及中部太平洋諸島（究リニハ）布哇ヲモ含ムル占領ノ精密ニ作成セラレタ計畫ニ限

ラレテ居タ様デアツタ豪州モ近西薩モ、明カニ
 當面ノ軍事目標トハ考ヘラレナカツタ。日本軍
 ハ之ヲ單ニ外部ノ援助ヨリ遮斷スル事シカ意圖
 シナカツタ。印度トイフ言葉ヲ俘虜ハ唯一度、
 アル高級士官ガ「其處カラ「ドイツ」トノ連絡
 ガ始ラウ」ト言ツタ時聞イタゲダツタ。
 右會議（及演習）ハ九月十三日頃ニ終ツタ。俘
 虜ハ右ノ草稿ヲ吳ヘ、同所カラ、ランチデ往島ニ
 碇泊中ノ山本ノ旗艦、長門へ持込スルノヲ援助シ
 タ、幕僚ノ約半數ハ既ニ歸艦シテキタ。
 九月十五日幕僚全員ハ四名ノ主計兵曹（俘虜ヲ含
 マズ）ヲ伴ヒ陸軍側ト協議スル岩國海軍航空隊
 へ送イタ。俘虜ハ寺内ト云フ名ガ出サレタ事ヲ記
 憶シテキルガ、他ノ名前ハ思ヒ出セナイ。
 東條「當時尙陸軍大臣」ハ出席シナカツタト主張
 シテキル。本會議ニ於ケル陸軍側代表ハ眞珠灣攻
 撃計盤ヲ豫メ聞イテイナカツタト廣ク嘘サレテ居
 タ。（然シ他ノ證據ニヨツテ確認サレテ居ナイ。）
 長門ハ更ニ六日位往島ニ滞留シタ。九月末艦隊
 ノ主力ハ佐伯へ移動シタ。旗艦ノ佐伯碇泊中重大

ナ變化ハ無カツタケレドモ機密聯合艦隊命令作第一號ハ西岡改定セラレタ。

十一月一日ニ石司令ノ最後ノ印刷ガ始メラレタ。完履スルノニ約三日ヲ要シタ。二部ガ陸軍ニ送ラレタ。佐伯旋泊中他ノ艦隊ノ參謀達ハ直接ノ命令ヲ受ケトリニキタ全部デ三百部ガ配布サレタ。了日×日ト指定ノ作戰命令第二號及ビ第三號ハ夫々十一月五日ト十日、ニ發セラレタ。

(註、該ハ勿論ソノ作戰命令ニ東亞時ヲ甲ヒル即チ、眞珠灣攻撃ノ十二月八日ハ正シイ東亞時デアアル。)

俘虜ハ會テ右作戰命令ヲ評シク知ツテキタ。最過間ニ亘ツテ彼ハ右司令ヲ愚ヒ出セル丈ヲ紙上ニ再現シヨウト勞メタ。コノ命令ハ明カニ不完全デ原本ニ比ブベクモナイカ至ナル機要ニ於テハ愛愛上印刷サレタ事リデアルト信ジラレル。

次ノ命令中括弧内ノ註ハ編輯者ノ追記シタモノデアアル。

佐伯灣 旗艦 長門

昭和十六年十一月一日

機密聯合艦隊命令作第一號

大日本帝國ハ米國、英國及ビ和蘭ニ對シ宣戰ヲ布告セララル。

宣戰ハ×日ニ布告サルベシ

本命令ハ×日ヨリ發效セララルベシ

一般狀況

(イ) 米國ニ對スル政策

帝國ガ米國ニ對シ終始、友好的態度ヲ維持シ來レルニモ拘ラズ、米國ハ我々が東亞ニ於ケル權益擁護ノ爲自衛上取り來レル總ベテノ處置ニ對シ干涉シ來レリ。最近同國ハ蔣介石政權ヲ援助スル事ニヨリ我方ノ支那事變ノ迅速處理ヲ阻止シ經濟外交ノ以後的暴舉ヲサヘ政ヘテ圖交セリ。一方同國ハ不當ニ日米交渉ヲ遲延シツツソノ軍力ノ強化ヲ擴大、艦隊ヲ太平洋ニ集結ヤシメ我方ニ脅威ヲ與ヘタリ我等ニ經濟的、軍事的壓力ヲ加エント企テツツアリ。

Dec 1625

(ロ) 英國ニ對スル政策

英國ハ蔣介石政権ヲ援助シ、ソノ同盟諸國及
ビ米國ト協力シテ東亞ニ於ケル我等ノ建設計
畫ヲ妨害シツツアリ。

最近同國ハ我等ヲ脅威セント企テ東亞ニ於ケ
ルソノ基地ヲ着々ト強化シツツアリ。

(ハ) 南領印度ニ對スル政策

平和的經濟交渉ヲケ月ニ亘リ我方万トノ開ニ
行ハレツツアリシニモ拘ラズ、南領印度ハ米
英ノ使職ヲ受ケ相互ニ利益ナル經濟關係ノ繼
續ヲ拒否スルニ至レリ。最近同國ハ多年營々
辛苦ノ結果築キ上ゲタル在日日本人ノ財産ヲ
脅威スルニ至レリ。

(ニ) 支那沿岸ノ諸港及ビ廣大ニシテ肥沃ナル地域

ハ我軍ニヨリ占領サレ又大都市ノ大部分ハ我
ガ占據下ニアリ。然レドモ支那ハ米、英ノ支
援ニ依リ「抗戰救國」ノ惡夢ヨリサメズ、全
支ニ亘ル燒土流戦ノ形式ニテ日本ニ對シ全面
的ニ抵抗ヲ企圖シツツアリ。

組織的抵抗ハ次第ニ弱化シツツアルモ、ゲリ

Doc 1628

ラ戦ノ膠梁ハ我方ヲシテ多數ノ軍隊ヲ同國ニ於テ恒久的守備任務ニ服セシムルノ止ムナキニ至ラシメタリ。我等若シ決定的勝利ヲ得ントセバ、支那背後ノ國家、米、英ヲ破砕セザルベカラズ

(ホ) 對スル政策

ソノ環境ノソ聯兵力ハ恐ルベキモノナリ。ソヴェット社會主義共和聯邦ハ虎視眈々トシテ膨脹ノ機會ヲ待チツツアルモ帝國ヨリ、ソ聯ヲ攻撃セザル場合ハソ聯ハ敢ヘテ開戦セザルモノト信ゼラル

我方狀況

第四艦隊ハ南洋委任統治諸島ニ於テ艦ネ準備ヲ完了セリ。第十一航空艦隊（沿岸基地ヲ有スル海軍航空隊）ハ支那領印度支那及泰國ノ主要基地ニ於テ準備ヲ艦ネ完了セリ。

我艦船及ビ航空機ノ修理狀況ハ艦ネ良好ニシテ將兵ノ練度ハ著シク向上セリ。

戰略目的

大東亞ヨリノ米英ヲ驅逐シ支那專横處理ヲ迅速ナラシムルコト。加之、米英ヲ葡印及比律

35

Dec 1628

36

資ヨリ編纂ヤラレタル點ニハ、訂立ヤル目録、

目録經濟函ノ確立ヲ期待シ得。

我國兵ノ精神的指標タル、宏大無邊ナル原則

(八紘一字ノ精神)ハ世界ニ闡明ヤラルベシ。

此ノ篇ニ我等ハ必貴ナル全兵力ヲ用ヒントス。

戦略

米、英及ビ爾ニ對シトルベキ戰略ハ附屬書ニ

指示セラルル。X日及ビY日ハ追テ發令セラル

ベシ。若シY日以前ニ敵ガ我計畫ヲ深知シ得

タリト信セラルル場合ハX日ノ實施ハ特別命

令ノ定ムル處ニ依ル。若シX日以前ニ敵ヨリ

攻撃ヲ受ケタル場合ハ右攻撃ハ使用シ得ル全

力ヲ以テ擊破スベシ。コノ場合各司令官ハ

「敵ノ攻撃ヲ受ケタル場合ニ採ルベキ戰略」

ニ從ヒ行ハスベシ。

ソレニ對シテハ戰爭ノ誘發ヲ極力回避スル爲

ニ全力ヲナスモノトス、同時ニ又我計畫ノ秘

密ヲ保護スル爲ニ凡ニル努力ヲナスモノトス

高一級ガ我計畫ヲ深知ヤバ「ソレノ攻撃ヲ受

ケタル際トルベキ万策」ニ準據シ直ニ軍事行

動ヲ開始スベシ。

37

Doc 1628

本命令ノ配布ハ總司令部長官及ビ戰隊司令官
ノミニ限定セララル。
該司令長官及ビ司令官ハ計畫實施前ニ於ケル
本計畫ノ漏洩ヲ防止スル爲アラユル万策ヲト
ルベシ。

注意 本命令書ノ處理

Dec 1628

本命令書ハ用済後速ニ焼却スベシ。万一艦船ノ沈没及ビ其他ノ避ケ難キ事故ノ結果本命令ガ敵手ニ落テル危険アル場合責任指揮官ハ自ラ直チニソノ處分ヲナスベシ。

機密聯合艦隊命令作第一號

別冊

一 陸海共同作戦ハ「陸海軍中央協定」ニ準據シテ遂行セラルベシ

ニ 攻撃部隊（空母機動部隊）ハ第一航空艦隊（空母及護衛艦）ヲ主力トシテ××十六日頃海軍基地或ヒハ作戦地域ヲ出發、單冠灣（千島列島、擇捉島ヒトカツブ湾）ヲ經テ、米國太平洋艦隊ノ基地、眞珠灣ニ向ケ出發奇襲ヲ決行ス。

×日ハ十二月上旬乃至中旬ト予想サルベシ。

三 攻撃目標ハ飛行場、航空母艦、戦艦、巡洋艦及ビ其他ノ軍艦、商船、港灣設備及ビ陸上施設ノ辰トス。

四 艦隊司令官ニヨリ定メラレタ攻撃部隊ノ日本出港時以後、嚴重ナル無線管制ヲ行フベシ。通信ハ通常ノ放送通信系ニヨル。使用サルベキ暗號表ハ、

Doc 1628

39

「(不定)」ナリ。左ノ通信略語ハ用ヒラル。
「眞珠灣ニ多技ノ軍艦」
「帝國ノ運命」
「眞珠灣ニ陸揚ナシ」
「櫻ガ浦開テス」
「天氣晴朗ニシテ一帯ノ視界良シ。攻^{ゲキ}ニ適當」
「富士山ニ登レ」

「攻撃開始時ハ〇五二〇」
「本能寺ノ港ノ深サハ〇五二〇」

「至直突撃セヨ」
「新高山ニ登レ」

其攻撃隊ノ方向及配置ハ機動部隊指揮官之ヲ定ムベシ。

機動部隊指揮官ハ攻撃隊ノ方向及配置ヲ決定後直チニ關係將官ニ報告スベシ。一般商船ノ航行ヲ回避シ如何ナル状況ノ下ニ於テモ計畫ヲ變更サセ又注意ガ拂ハルベキコト。

六 攻撃隊發動以前ニ於テ宣戰ヲ布告サルベキ國ノ船舶及中立國(ソ聯ヲ含ム)ノ船舶ニヨリ発見サレタル場合ニトルベキ處置。

(イ) 宣戰ヲ布告サルベキ國ノ船舶ニヨリ目標ノ六〇〇哩以内ニ於テ、発見サレタル場合ハ直ニ之ヲ攻撃準備ヲナシ撃沈スベシ。

(ロ) 中立國ノ船舶ニヨリ目標ノ六〇〇哩以内ニ於テ
 発見サレタル場合ハ該船ヲ直チニ捕獲我が企圖ノ
 實施ニ何ラ妨害トナラザル時迄拿捕スベシ、該船
 ノ無線通信ハ嚴重ニ監視サレルベシ。我々危害ヲ
 與ヘ又ハ我計畫ヲ暴露サセル虞アル通信ヲナシタ
 ル場合ハ直チニ驅逐艦ニヨリ攻撃ヲ準備シ捕捉セ
 ラルベシ。

(ハ) 目標ヨリ六〇〇哩以上離レテキル時外國船舶ニ
 発見サレタル場合、該船舶ヲ拿捕シ通信ヲ禁止ス
 ベシ。モシ我一般的企圖ガ發覺サレタル恐ガ多分
 ニアルトキニハ×一五日ト×日トノ間ト雖モ直チ
 ニ攻撃スベシ。モシ×一五日以前ト雖モ情況ニヨ
 リ機動部隊指揮官ハ該船舶ノ處置ヲ決定スベシ。
 敵船舶抑留ノ場合ハ「B」法ニ據ル。

七 第六艦隊（潜水艦隊）ヲ基幹トスル奇襲部隊ノ指
 揮官ハ×一二十日ニ眞珠灣攻撃ノ爲、内海西部カ
 ラ潜水艦ノ大部分ヲ出撃セシムベシ。ソノ全力ヲ
 アゲテ灣口ヲ制扼スルガ如ク配置セラルベシ。
 灣口カラ逸脱セントスル敵艦ヲ攻撃スベシ。尙同
 艦隊ハ攻撃事前ニ偵察ヲ遂行シ機會アラバ小型潛
 航艇ヲ以テ敵艦ニ奇襲攻撃ヲナスベシ。但シ攻撃

Doc 1628

ノ時期ハ航空機隊ガオアフ島ヲ攻撃セル後トス
小型潛航艇ノ收容ノ爲ニハアラユル方途ガ考究セ
ラルベシ。

ハ陸海軍共同作戰ハ「陸海軍中央協定」ニ從ツテ遂
行スベシ。兵力ノ配備ハ前進部隊（主ニ第二艦隊
ノ巡洋艦及驅逐艦）ノ指揮官ガ之ヲ決定スル、前
進部隊ノ指揮官ハ攻撃隊ノ進路及ビ配置ヲ決定後
直チニ關係將官ヘ報告スベシ。
馬來及ビ佛印軍ノ船舶出發地ハ馬港、比島占領軍
ノ出發地ハ多分バラオトス。

ハ米英軍ノ船舶及將兵ノ拿捕ハ支那方面艦隊司令長
官ニヨリ指揮サル。香港ノ占領ハ「陸海軍中央協
定」ノ條項ニ準據シ第二遣支艦隊司令長官ノ權限
ニ屬ス。

十、日本統治權下ノ港灣又ハ占據サルベキ港灣ニ開戦
時停泊中ノ米英船舶ハ能フ限り捕獲スベシ。

ソヴイエットノ船舶ハ嚴密ナ臨檢ノ後、監視下ニ
置ク可シ。

開戦時我船舶ガ一隻ト雖モ外國ノ港灣ニ停泊セザ
ル様計畫サルベキデアル。

41

十一 Y日ヨリ第一通信隊ノ指揮官ハ艦隊主力ハ内海

西部ニ在ルガ如ク印象ヲ與ヘル爲僞電ヲ發ス

Y日決定後米國西岸へ航行スル事ニ定メラレテキ
ル日本郵船會社ノ龍田丸ハ既定通り出帆セシメ中
途デ引返ス準備ガセラルベキ事

(之ハ實行サレ聯合國ノ船客ハ拘禁サレタ、此ノ
期間ニ出航予定ノ何レノ太平洋横斷ノ定期船ニモ
同様ノ手戻ガトシレタデアラウ)

Y日決定後、横須賀鎮守府司令長官ハ虛偽ノ印象
ヲアタヘル様ニ彼ノ指揮下ノ海軍將兵ヲ出來得ル
限り東京及横濱方面ニ上陸外出セシム(別ノ一停
虜ガ之ヲ確認ス)

十二 第四艦隊(南洋委任統治地方西艦隊)司令長官
ハ南太平洋第十一航空艦隊ノ部隊ト緊密ナ協力ノ
下ニ行動シ北及南太平洋ノ英米蘭ノ基地ノ攻撃ト
占領ヲ促進スル

我が作戦國內ノ敵艦實力ヲ阻止シ濠洲ト米本土間ノ
聯絡ハ遂ニ杜絶セシム

コレヨリ濠洲ハ孤立化サレ完全ニ統治サレル事ガ
豫期サレル、カクテ尨大ナ濠洲大陸ノ誇ル益テノ

Doc 1628

天然資源ハ我ガ手ニ入ルデアラウ

(英國、合衆國、和蘭陀ノアラユル基地ノ攻撃及
占領實施日附ハソレカラ此ノ段ニノセラレタ。

ソノ少數ハ左ノ如シ)

(一) グアム 約 × 十二

(二) ウエーキ 〃 × 十七

(三) (ラバウル及ソロモン群島ヨリ、フィジ、サモ
アニ至ル群島及サンタクルズ群島ノ侵略ノ日

取モ全部記入サレテキタ)

十三ミツドウェイノ攻略ノ日附ハ一九四二年(昭和
十七年)ノ晩春ト定メテアツタ、布陸群島ノ占領
ノ日附ハ一九四二年(昭和十七年)十月ト計畫サ
レタ。

前述参照ノ書類ノ二ツヲコ、ニ記載ス。

陸海軍中央協定

大本營陸軍部及ビ大本營海軍部ノ協同作戰ニ於ケル
職務及ビ命令ノ限界ヲ明瞭ニスル目的ハ高度ノ能率
ヲ發揮ノタメデアツタ。(停戦ノ言ニ據レバ、其レ
ハ一九四一年(昭和十六年)十月ニ發行セラレタ、
其ノ内容ノ概略ハ次ノ如シ)

45

一 スマトラ、ボルネオ、馬來半島、セレベス及アイ
リツピン（佛領印度支那及泰國ヲ含ム）方面ノ陸
軍最高司令官ハ寺内壽一元帥デアアル彼ノ管區ハ南
方直ト稱シ總司令部ハ西貢ニ置カレル

二 陸軍大輸送船團ノ護衛、上陸地點、期日及時間ニ
ツイテ計畫

三 陸海兩軍ノ航空機ヲ以テ攻撃スル場處及ビ陸軍又
ハ海軍ノ單獨攻撃ノ場處、期日、時間ニ付テノ航
空戦取極メニ關スル協定、使用スベキ飛行場ニ關
スル取極メ、例ヘバ「××飛行場ハ陸軍ガ主用シ
海軍ガ第二次的ニ使用スル」ト云フ様ナモノ

四 補給計畫

陸軍上陸部隊ニ對シ陸軍輸送船ガ海軍ノ援助ニヨ
リ成シ遂ゲルベキ補給計畫

五 通信計畫

六 占領地域、都市及發源地ニ關スル取極メ例ヘバ

「パン、ジャマシ石油精製所ハ海軍ニ依テ統制
サレル」ト云フ様ナモノ

ソ聯攻撃ノ場合ニ深ル可キ手段

(俘虜ハ日ヲ正確ニ記憶シテナイガ十月ノ末デアツ
タト思ヒ左ノ如ク陳ベタ)

吾々が先ニ攻撃セザル限り、ソ聯カラ先制攻撃ヲ受
ケナイデアラウ、然シ日本ガ先ニ攻撃サレタ場合ニ
ハ第五艦隊(北方部隊)ハ全力ヲ以テ反撃シ、局地
的弱點ヲ持続スベシ

聯合艦隊司令長官 山本 五十六

一九四一年(昭和十六年)十一月十日

佐伯灣ニ於テ 旗艦 赤城

攻撃部隊作戰命令第一號

- 一 全艦艇ハ十一月二十日迄ニ戦闘準備ヲ完了スベシ
- 二 本艦隊ハ單冠灣(千島、擇捉島、ヒトカツブ灣)ニ
集合スベシ

- 三 來ル可キ作戰計畫ハ嚴密ヲ保サルベキヲ以テ日本
ニ於ケル發航地ヲ出航シタル後ニ乗組員ニ對シテ
説明セラレルマデ本計畫ニ關シ嚴重ニ秘密ヲ保持
スベシ

四 攻撃機隊ノ内譯

Doc 1628

赤城第一攻撃機隊

隊長 海軍少佐××

第一空母攻撃隊

等々（詳細ハ俘虜記憶セズ）

三 艦隊巡航編成（退却編成ヲ含ム）

六 無電通信ハ全部嚴禁ス

通信及受信ハ共ニ東京第一放送通信係ヲ使用ス
ベシ

攻撃部隊指揮官 南 雲 忠 一

機密聯合艦隊命令作第一號中不明瞭ナル點ニ就イテ
ノ聯合艦隊參謀長ノナシタル口頭說（詳細ノ所見及
說明ハ非公式談話デ各艦隊司令長官ニ配布サレタ命
令ニハ含まレザル詳細ノ點ニツイテノ說明ヲ印刷シ
タモノ）

一 來タルベキ對米英宣戰布告ハ世界ノ二大海軍國ヲ
向フニ廻シテノ國家存亡ノ大戰爭トナルダラウト
云フコト、

此ノ戰爭ハマコトニ、吾ガ存亡ヲカケタモノデア
リ我武力ヲ以テ攻撃スル外ニ道ノ無イ戰爭デア
ルト云フコト、

ニ我ガ海軍ハ茲ニ好敵手ヲ得テ帝國海軍創設以來念
願トシタ理想ヲ實現セントシテキル事

46

三 獨逸トノ同盟ハ海軍側ハ希望シナカッタガ、ソ聯ヲ抑ヘ得ルトノ見解ノ下ニ陸軍ガ支持シタ計畫デアツタト云フ事

四 蘭印、ヒイリツピンニ於ケル作戰以前泰ト印印ニ前進基地ガ獲得サレルト云フコト、コレヲノ作戰ハ極メテ圓滑ニ進行スルト信ズル今次ノ作戰ニ依リ海軍ハ速ヤカニ石油ノ確實ナ供給源ヲ確保シ得ルダラウ

五 眞珠灣攻撃ニ關係シテハ大西洋艦隊ヲ含ム老大ナル艦隊ガ眞珠灣ニ集結シタト云フ報告ガアルト云フコト

此ノ艦隊ハ戦端開始スルヤ直チニ一撃デ完全ニ粉碎スルノデアアル、コレニヨツテ海軍力ノ均衡ヲ轉ゼシメ劈頭カラ敵ヲ混亂サセ士氣ヲ沮喪サセル計畫デアアル

然シ乍ラ我々ノ目的ハ三千哩以上ノ彼方ニ在ルノダ、此ノ大艦隊ノ集結ヲ攻撃スルニ當ツテ計畫ノ段秘ヲ保ツ爲ニハ幾多ノ困難ニ遭遇スルダラウ、若シ此等ノ計畫ガ何レノ段階ニ於テ失敗ニ歸スルダラバ我海軍ハ再ビ立上ラレザル慘メナ運命ニ會フダラウ

Doc 1628

我眞珠灣奇襲ノ成功ハ今後ノ戦争ノ「ウオーター
ル」トナルダラウ、コノ理由ニ依リ帝國海軍ハ成
功ヲ確實化スルタメ艦艇ニ航空機ニソノ力ノ粹ヲ
集メテイルノデアアル。

第一航空戦隊第二航空戦隊及第五航空戦隊ノ全飛
行機ハオアア攻撃ニ集中セラレ、若シ逸脱セント
スル艦艇アラバ第六艦隊ハソノ潜水艦ノ殆ンド全
兵力ヲ以テ灣口ヲオサヘ、魚雷ノ集中攻撃ヲ行フ
ソレニ加ヘテ（第一水雷戦隊）ノ驅逐艦勢力ハ、
（主トシテ夜間攻撃ノタメ）警戒部隊トシテ展開
シ第三艦隊ノ高速戦艦ハ梯陣ニ展開スル、若シ敵
艦隊ノ主力ガ眞珠灣カラ逃ゲテ外海ヘ向ヘバ我艦
隊ノ主力ガコレヲ邀撃スルデアラウ

六 特殊潛航隊ハ吳重港ニ於テ一年半ノ間母艦千代田
ノ下ニアツテ研究シ訓練シテキルモノ、マダマダ
完成ノ域ニ達シナイガ兎ニ角乗組員ハ此ノ上ナキ
確信ヲモツテキル、第六艦隊ハソレヲ港内ノ攻撃
ニ使用スル計畫デアラウ

七 モシ、アメリカノ尨大ナ重工業生産力ガ直チニ船
舶、飛行機及其他ノ軍需物資ノ製産ニ轉換サレテ

モ、我ニ對抗スルタメソノ人的資源ヲ動員スルニ
 ハ少ク共敵ケ月ヲ要スル事ハ明白デアアル
 モシアメリカノ準備未ダナラザルウチニ我々が開
 戦劈頭ニ一撃ノモトニスベテノ據點ヲ攻取占領シ
 戦略的優位ヲ確保スレバソノ後ノ作戦形勢ヲ我ニ
 有利ナヤウ展開スル事が出來ル

ハ天モ我々ノ戦争ノ正シキコトヲ昭覽アルデアラウ
 各人ハ此ノ戦争ガモタラス未會有ノ機會ヲ充分ニ
 認識シテ我々ノ本來ノ目的ヲ斷乎トシテ遂行シ此
 ノ聖戦ノ目的實現ノタメ全力ヲ盡スコトヲ希フ
 通信計畫

(俘虜ハ此ニ就テハ知ラズ 詳細不明)

補給計畫 (概略)

濱須賀、吳及佐世保海軍基地ハ後方補給基地ト
 ナリ

馬公、バラオ、トラツク及大湊ハ前進補給基地
 トスル

コレラニ加ヘテ、補給船ガ各艦隊ニ配屬セラレル

機密聯合艦隊命令作第二號 十一月五日

Y日ハ十一月二十三日トス

Doc 1628

機密聯合艦隊命令作第三號

十一月十日

×日ハ十二月八日トス

眞珠灣ヲ實際ニ攻撃スル間ハ、此ノ俘虜ハ帝國內ニ在ツタ聯合艦隊司令長官旗艦長門ニ殘留シタ、攻撃ヲ敢行シタ空母機動部隊ニ就テノ詳細ハ他ノ俘虜達及ヒ書類ニ依リ知り得タ。例ヘバ該書ノ他ノ部分ニ再成シテアル第一航空艦隊ノ行動ノ略圖ヲ見ヨ

機動部隊ハ千島列島津捉島カラ十一月二十七日頃

(東經時間) 出撃シ攻撃ノタメ南轉スルマデハ惡天候ヲ冒シテ東進シタ

故海軍中將南雲(第一航空艦隊司令長官)ノ指揮シタ艦隊ノ編成ハカナリ能ク分ツテ居ル、敵ハ六隻ノ空母即チ

加賀、赤城(第一航空艦隊)蒼龍飛龍(第二航空艦隊)翔鶴瑞鶴(第五航空艦隊ヨリ鳳翔ヲ除ク)二隻ノ戦艦即チ比叻霧島(第三艦隊ヨリ金剛及榛名ヲ除ク)三隻ノ巡洋艦即チ利根、筑摩(第八艦隊)ニ阿武隈及ビ第一水雷艦隊ノ艦船ト約廿隻ノ潜水艦ヲ持ツテイタ

(註釋、筑摩ヲ加ヘ参加シタル航空母艦ノ全部六隻及兩戦艦ハ沈没シタト認メラレテイナイト云フ事ハ

50

注目ニ價スル、他ノ參加部隊ノ多クモ、決定的ナ確
認ハ未ダ不可能デアルガ沈没シタルカ甚ク損害ヲ受
ケタト信ゼラル

出撃中最モ日本軍ノ頭ヲ悩マシターツノモノハ、補
給問題デアツタ、良ク事情ニ通ジ補給作業隊ノ一等
兵曹デアツター一俘虜ハ高速ナ蒼龍及飛龍ヲ給油スル
ニ用ヒタ應急手段ニツイテ述べタ此ノ二隻ノ母艦ハ
毎日給油セラレ飛行機ノ離陸地點ニ向ツテ快速力デ
猛進ヲ始メタ時ニ甲板上ノ荷物トシテ積ンデアツタ
「ドラム」艦カラバケツ隊ニ依ツテ給油シタ。然ル
ニモ拘ハラズ蒼龍ガ呉ニ到着シタ時ニハ油槽ニ僅カ
九十五屯シカナカツタ。艦船ニ給油スル爲機動部隊
ニ横附シタ油槽船ハ相當ナ困難ニアツタ、視界ガ非
常ニ悪カツタノデ位置ヲ一定スルタメノ曳索ガ殆ン
ド絶ヘズ用ヒラレタ

攻撃ノ際、撃破サレタ飛行機及海岸ニ乗上ゲラレタ
小型潜航艇カラ取り出シタ書類カラ可成リノ情報ガ
得ラレタ。コレヲノ押収サレタ文書ノ中ニハ失敗ニ
終ツタガ眞珠灣ヲ通過スル事ヲ計畫シタ潜航艇ノ予
定航路圖ガアツタ。コノ潜航艇ハ翌日オアフ島ノ反
對側ノ海岸ニ打上ゲラレ二人ノ乗組員ノ中一人ガ俘

度トナツタ。捕虜カラハ何ノ情報モ得ラレナカツタ
 ガ潜航艇ハ真珠湾入口近クノ暗礁デ破損ヲ受ケ音響
 装置ヲ破壊サレ退却ヲ余儀ナクサレタモノト信ゼラ
 レル。此ノ潜水艦ノ魚雷発射管ヲ後デ討ベタ結果魚
 雷ヲ発射シヨウトシムガ發射装置ガ故障ヲ起シタ事
 ガ分ツタ、應援シテ再裝不能ノ原本ハ周到ニ日本語
 ニ翻譯サレタ詳細ナ航海表ノツイタ合衆國海軍水路
 局ノ海圖デアツタ事ハ明白デアアル、海圖ニハ色々ナ
 書込ガ亂雜ニ記サレテ居リ其ノ中ニハ不明瞭デ譯セ
 ナイモノモアル、裏側ニハ航海等ニ關スルコトガ頁
 ニ記サレテアツタ、潜航艇ハ亦地平線カラ見タ真珠
 湾ノ粗雜ナ側面圖ヲ持ツテ居タ、
 潜航艇ノ任務ハ攻撃ト偵察ノ兩方ヲ兼ネテキタ。海
 圖ノ上ニ示サンタ假名略語ハ、航空機カラ發見サレ
 タ略語ト同様ノモノデアツタ。少ク共モ三隻ノ日本
 小型潜航艇ガ此ノ時ノ我方ノ反撃デ失ハレタ、一隻
 ハ確カニ港内ヘ入ツタガ五吋砲彈ノ直撃ヲ一發受ケ
 其ノ後衝撃サレ爆雷攻撃デ滅茶々々ニ破壊サレタ。
 日本側ハ此等ノ小型潜航艇ノ五隻ノ損失ヲ認メテ居
 ル。

五、一九四一年（昭和十六年）十月

イ、戦争ニツイテノ流言（トラツク）

一九四一年（昭和十六年）十月中海軍ノ勞務者トシテトラツクニ居タ俘虜フセイ、イワタロ（JA 第一四三一、八號）ハ次ノ如ク陳述シテキル

「一九四一年（昭和十六年）十月彼ガトラツクニイタ時、米國トノ戦争ハ早クテ一九四一年（昭和十六年）十二月二十五日、遅クテ一九四二年（昭和十七年）二月一日ニ始マルダラウト云フ噂ガアツタ、一九四一年（昭和十六年）十一月彼ガ日本ヘ歸ヘツタ時、戦争ノ噂ハ、トラツク程ハ飛ンデイナカツタ」（聯合軍機譯通譯部訊問報告書連續番號第九七號四頁）

六、一九四一年（昭和十六年）十月十日

イ、上陸作戦ノ準備

第四十二徒泊編隊隊長陸軍中佐リュウトウ（音譯）ノ發シター一九四二年（昭和十七年）六月十五日附ノ「状況報告」ハ次ノ如ク述ベテイル、

「動員以後ノ一般状況ニ關スル記録」

「動員令ハ一九四一年（昭和十六年）九月十二日發セラレタ、廣島西部第二部隊ヨリノ編制ハ九月十七日ニ完了シタ、吾々ハ九月二十九日宇品ヲ出發シ、大阪ニ至リ同地ニ於テ第四十海上勤務中隊ガ吾々ニ配屬サレタ、吾々ハ十月一日大阪ヲ出發シ十月十日ニバラオニ於ケル吾々ノ目的地ニ着キ此地ニ於テ使泊場司令部ヲ設置シタ、ソレヨリ大東亞戦争ニ附隨サルベキ上陸作戰ノ準備ヲシタ

(SOPAC 翻譯連續番號第一四七九號第六五五項第一頁)

七、一九四一年（昭和十六年）十一月十二日
イ、マライ作戰ノ準備

歩兵第四十一聯隊ノ兵長カシノヒサゾウノ履歴書ニハ次ノ事ガ記入シテアル

「一九四一年（昭和十六年）十月十日ニンポー出發

十月十一日 上海上陸

十月十二日ヨリ十一月十四日ニ至ルマデ上海附近ニ於テマレイ作戰ノ準備ヲシタ

十一月二十二日上海ノ吳淞ヲ出發十二月八日泰國ノシンゴラニ上陸（聯合軍翻譯通譯部最近ノ

翻譯第六四號十六頁ヨリ十七頁マデ）

Dec 1628

八一九四一年（昭和十六年）十一月四日

イ、ジャングル戦ノ準備

歩兵第四十一師隊ノ一員ノ日記ニハ次ニ引用シタル要領ヲ誌サレテキル。歩兵第四十一師隊ハ海南島サマニテ準備シタマライ攻勢ニ参加シタノデアリ。

「一九四一年（昭和十六年）十月十二日吳淞波止場ニ到達シソシテ「キヤングワウ」兵舎へ戻ツタ。

十月二十三日 オカベ部隊ハ集合サセラレ、新任旅團長河村（音）三郎少將ヨリ訓示ヲ受ケタ。明日三ヶ大隊ノ一隊査閲アリ。

十一月四日 豫想サレタル糧類ノ搬入ノ爲ノジャングル戦

十一月十三日 熱帯戦用ノ配給品及ビ外ノ必要品（藥品及衣類其他ヲ受領ス。

十一月二十日 海南島ノ海口沖合ニ碇泊シタ。

十二月二日 抜錨、「サマ」ニ向テ再ビ航行シタ。

十二月十五日 我軍ノ砲及戦車ニ搬送サレテ我々ノ部隊ハ「グーバン」街ニ一番乗ヲシタ。大森大尉、「ニツキ」中尉、及高橋少尉ハ戦死。岡野及柳澤中尉ハ戦傷ヲ受ケタ。

一九四一年(昭和十六年)十一月十日

凡テノ日本兵ガ外地ニ出帆スル前ニ各一册支給セラルベシト下記ノ「本營ヲ讀ミサヘスレバ戦ハ勝ツ」ト題スル「パンフレット」ノ表紙ニ書カレテアル。

其口繪ハ南支那、佛印、泰國、緬甸、馬來聯邦、南領東印度及濠洲西北海岸ノ一小部分ノ地圖カラ成立テ居ル。パンフレットノ發行期日ハ明白ニ分ツテ居ラナイガ然シ鹵從シタ一册ニハ第十五師團歩兵々團ニ依ツテ一九四一年(昭和十六年)十一月十日ニ受領サレタト印ガ押シテアル。(第五五部隊ノ要員ハ一九四一年(昭和十六年)十二月中「グアム」ノ攻撃上「ビルマ」作戦ニ業務ヲ活耀シナシタ。)

且其長サト内容ノ性質カラ見テモ之ヨリズツト以前ノ期日ニ於テ本來ノ準備ヲシタモノト思ハル。左ニ「パンフレット」ヨリ適切ナ箇所ヲ轉載ス。

「南方ノ戰場ハドンナ場所デスカ。

(一)ソレハ英米佛及蘭ノ白人ニヨツテ侵略サレタ東洋ノ寶庫デアル。

Doc 1628

「二十億ノ東洋人が三十萬ノ白人ニ依テ壓迫サレテ居ル。

「之ハ結局之等ノ白人ハ生レタ瞬間カラ二十名以上ノ東洋人ノ奴隷ヲ持ツテ居ル勘定ニナル。之レガ神ノ意思デスカ。

「(三) 油、ゴム、錫等ヲ世界ニ供給スル本源地デア
アル。

「ゴムト錫トハ軍需ニ必要デコレ等ノ貴重ナ資源ニ就テハ南方諸國ハ東洋テ最モ豊富デア
ル。日本ガ之等ノ材料ヲ正當ナ手段テ買フコトヲ遮ゲタ
ル米ノ惡意ハ今次ノ軍需行動ヲ必要ナラシメタ原因
ノ一ツデア
ル。

「蘭領東印度及佛印ハ單獨テ日本ニ抵抗スルコトガ出来
ナイコトハ至ク明白デア
ルガ然シ英米ノ被
護ト威嚇ヲ以テ彼等ハ日本ニ敵意ヲ示シテ居
ル。油ト鐵ノ不足ハ日本ノ弱點デア
ルガ、然シゴム、錫及タンダステンノ不足ハ米國ノ最大ノ弱點デア
ル。米國ニ之等ヲ供給スル主ナル資源地ハ南洋ト南支デア
ル。之等ヲ遮断スル事ガ出来レバ日本ガ最モ必要トスル油ト錫トヲ得ラ
レバカリテナク米國ノ最モ痛イ處ヘ小刀ヲ刺スコトニナル。日本ノ南
進ニ對スル米國ノ反對ノ主因ハ茲ニ存スルノ

テアル。

「(四)ソレハ常夏ノ國デアル。」

「バナナトパイナップルトハ一年中豊富デア
ル、同時ニ厄介ナマラリヤ性ノ蚊ガドコニモ
居ル。瓜哇及新嘉坡地域ニハ自動直道路ガ各
所ニ發達シテ居ルガ、人ヤ動物モ通ラヌ多ク
ノ未開ノ場所密林ヤ沼澤モアル。」

「何故我々ハ戰ハネバナラヌカ而シテドウ云フ
瓜ニ我々ハ戰ハネバナラヌカ。」

「東洋ノ平和ノ爲ノ望旨ニ依テ。」

「明治維新ハ日本ニ外國ノ侵略カラ救ツタ。」

東洋ノ平和ノ爲ノ望旨ニ從ツテ昭和維新ハ亞
細亞人ヲ彼等ノ相剋ト白色人種ノ侵略トカラ
救済シ亞細亞ヲ亞細亞人ニ返サネバナラヌ。
亞細亞ニ於ケル平和ハ當然來リ而シテ之ハ確
乎タル世界ノ平和ヲ招來スル。」

「日本ハ蘇聯ノ計畫カラ滿洲ヲ救ヒ英米ノ虐使
ヨリ支那ヲ開放シ而シテ泰國、安南、比律賓
ノ獨立ヲ助ケ斯クシテ南洋及印度ノ民族ノ幸
福ヲ齎ラスベキ使命ヲ與ヘラレテ居ル。之ガ
平等友愛ノ精神デアル。」

「(二)敵ヲ殲滅スルト共ニ罪ノナイ者ニ對シテハ、
情ヲ宥セヨ。」

Dec 16 28

「此戦争ヲ民族戦争ト理解シテ我々ハ獨逸人ヲ
除ク歐洲人ニ對シテハ我々ノ正當ナ要求ヲ主
張セズバナラヌ。」

「(三) 敵ハ支那軍ヨリ強イカ。」

「敵ヲ支那軍ニ比取スレバ將校ハ歐洲人デアツテ
テ下士官、大部分ハ原住民デアアル故軍隊ヲ通
ジテノ精神的統一ハ零デアアル。飛行機、戦車
及砲ノ敵ハ支那軍ニ比シテ遠方ニ運搬デアアル
コトヲ記憶シテ醫カズバナラヌ。然シ之等ハ
舊式デアアルバカリテナク其使用者ハ勇イ兵士
デアアルカラ余リ効果ハナイ。從テ敵ハ夜襲ヲ
最モ恐レルモノデアアル。」

「(四) 我々ハ戦争ガ長期戦ニナルコトヲ用意シ而
シテ長ク戦クモノト有ラユル準備ヲシナケレ
バナラヌ。」

「戦争ハドンナ経路ヲ辿ルデアラウカ。」

「長イ航海ニ次グ上陸作戦デアアル。」

「作戦地境ハ凡テ台湾カラ一千哩余ノ南洋デア
ル、或ル場所ハ到着スルノニ一週間カラ十日
モカ、ル。此ノ廣イ海ヲ數百ノ軍艦ノ護送船
團ト商船ガ通ツテ居ル、願ミレバ我々ノ祖先
ハ數百年前此荒海ヲ征服シ木造船ヲ通商ヲ
續シ又戦ヒモシタ。船中ニ閉込メラレタ數日

ノ航海ノ後陸上ノ敵ノ抵抗ヲ克服シテ上陸ヲ
敢行セシメバナラヌ。

「船上テ何ヲシナケレバナラヌカ。

「上陸作戰ニ於ケル最モ重要ナル事項ハ秘密ノ
嚴守デアアル。若シ敵ガ我々ノ上陸ヲ企圖シテ
イル地點ヲ事前ニ知ツタナラバソレハ非常ニ
困難ニナルデアラウ。

「手紙ノ甲ニ書カレタ簡單ナコトガ全軍敗北ノ
原因トナリ或ハ出陣直前カフエーデー一杯ノ酒
ニ洩シタ一言ガ原因トナツテ秘密ガ開謀ノ耳
ニ這入ツタ例ハ多クアル。

「四十七士ガ彼等ノ主君ノ恨ヲ晴ラス迄ハ新カ
ル苦難ヲ經テ彼等ノ秘密ヲ守ツタコトヲ忘レ
ルナ。御互ニ同ジ様ニヤルコトヲ勵マシ合エ
ヨ。

「今次事變中ニ南支ニ上陸シタ一部隊所屬ノ一
兵士ノヨイ例ノ話ガアル、彼ハ手紙ヲ書キ瓶
ニ封印シテ其ヲ海中ニ投ジタ。其手紙ハ潮流
ニ依テ朝鮮ノ海岸ニ運バレタ。手紙ガ浦鹽新
島ニ到着シタト假定スレバ、其結果ハドンナ
デアツタドラウカ。屢々我々ノ輸送船ノ行動
ヲ見附ケ様トシテ海上ニアル飛行機及潜水艦
ニ依ツテ手紙ガ得ラレル。應芥ヤ屑物ノ處理

ニモ注意ヲ辨ハネバナラヌ。

「取聞」

「(一) スコール、霧及夜ハ最モヨロシイ。

「歐羅巴人ハ伊達者デカヨクテ臆病デアル。

夫故國、霧及夜ヲ彼等ハ最モ嫌フモノデア

ル。彼等ハ夜ハダンス文ニ向イテ居テ城固ニ

ハ不向ト考ヘテ居ル。我々ハ之ヲ利用セネ

バナラヌ。

「(二) 支那兵ト違ッテ我々ノ今次ノ敵ハ更新ヲ使

用スルカモ知ラヌ。モシ若サノ爲敵ッテイ

ノガ苦痛デアル爲防毒マスタラ置キレバ甚大

ナル結果ヲモタラスデアラウ。

「特別地帯ニ於ケル行動

「沼澤ト水田ニ於ケル行動

「島印ト泰西ハ日本ニ次グ本國ニアリ。而シ

テ水田ガ到ル處ニアリ此處彼處ニ大キイ沼

池ガアル。此等ノ場所ヲ廻ル時ニハ、各兵士

ハ雪靴(藁ト小漆製)ノモノヲ用ヒバナラ

ヌ。

「今次ノ戦争ハ日本ノ六亡ヲ請ンタ戦争デア

ル。今モ日本ヲ徐々ニ侵蝕シテ首ヲ取メル機ニ漸次

日本ニ油ト鹽トノ輸出ヲ禁止スル米穀ノ行動

ノ真意ハ何デアラウカ。若シ米國ガ直ニ輸出ヲ禁止スレバ日本ハ必死ニナツテ南方ニ進軍スルデアラウ。南方ノゴムト錫ノ輸出ヲ日本ガ阻止サレ、バ米國自身ヲ打撃ハ油ト銅ノ缺乏ニ悩マサレル日本ノ夫レヨリモ遙カニ大キイダラウ。日本ヲ弱メルガ慾ヲサヌ様ニスルノガ今日ニ到ル迄ノ米國ノ政策デアツタ。

「日本ハアマリ永ラク待チ過ギタ。日本ガ此以上隱忍スレバ我々ノ飛行機、軍艦、自動車ハ動カナクナルデアラウ。支那事變開始以來五ヶ年ヲ經過シタ。一百萬以上ノ戰友ガ大陸ニ於テ彼等ノ骨ヲ露ラシテイル。此等ノ戰友ヲ殺シタ蔣介石ノ武器ハ主トシテ英米ノ手テ賣ラレタ。英米ハ共ニ東洋人ノ一致團結ハ東洋ヲ彼等ノ永遠ノ殖民地トスル目的ノ障礙物デアルトノ偏見ヲ持チ日本ト支那トヲ戰ハセル様ニ凡テノ勢力ヲ傾注シテ居ル。我々ノ盟邦獨伊兩國ハ英米蘇聯ニ對シ歐洲ニ於テ死戰ヲ繼續シテ居ル。米國ハ既ニ英國ヲ援助シテ居リ而シテ本質的ニ戰爭ニ參加シテ居ル。日本自身ノ存立ト三國同盟ヘノ義務ニ對シテ最早一刻モ我慢シテハイケナイ。日本ハ東洋民族

Dec 1628

ノ代表者トシテ數百年間ニ亘ル彼等ノ侵略ニ
對シ勇敢ニ最後ノ奮闘ヲ加フベキ一大使命ニ
直面シテ居ル。我々ノ比類ナキ海軍ハ全ク準
備ヲ完了シ無敵デアアル。數字ニ於テハ五、五、
三ノ比率デアアルガ精神力が加ハレバ五、五、
七デアアル。且英國海軍ノ半分ハ、精逸ニ修ツ
テ訓練サレテ居ル。海軍ニ取ツテハ今ガ絶好
ノ時デアアル。重慶政府ノ腐弱ハ英米ニ接續シ
テ居ル。コノ帶が直ニ斷タレザル限り日支軍
閥ハ永久ニ解決サレナイデアラウ。聖戰ノ總
決算ハ今次戰争デアアル。百萬以上ノ勇士ノ英
靈ハ我々ヲ擁護シテ居ル。戦歿セル戦友ヘノ
供養ハ此戰爭ニ勝ツコトデアアル。

「數千哩ノ海ヲ征服シ敵ノ妨害ヲ除去シ不敵不
休我々ヲ擁護シツツアル海軍ニ對シテ我々ノ
滿腔ノ感謝ヲ表スルト共ニ我々ハ何好ナル戰
果ヲ擧ゲテ其勞苦ニ充分イナケレバナラヌ。
我々ハ東洋民族ノ代表トシテ立テ二千六百年
ノ光輝アル歴史ヲ繼承シ、天皇陛下ノ御信任
ト御信頼トニ對シテ世界ノ歴史ヲ轉換スベキ
重大且名譽アル使命ヲ負ハサレテ居ル。將兵
一心、日本男子ノ眞價ヲ全世界ノ看視ノ的デ

Doc 1628

アル正装式ヲ表サネバナラス。東洋平和ニ對スル望慮ヲ體現ンテ亞細亞ヲ解放スル昭和維新ノ完遂ハ我々ノ双肩ニ掛カツテ居ル。

「海行カバ

水ヅク屍

山行カバ

草ムス屍

大君ノ邊ニコソ死ナメ

願ミハセジ」

(聯合軍機部通譯部書類第七三九六號)

十、一九四一年(昭和十六年)十一月十五日

「南洋ニ於ケル將兵ニ告グ」ト題スルパンフレットガ「グアム」攻撃ノ主力トナツタ爾海軍司令官堀井富太郎少將ノ署名ノ下ニ一九四一年(昭和十六年)十一月十五日ニ發行サレタ。書類ノ全譯ハ下記ノ通りデアル。本文内ノ□ハ原文ニアル通りデス。鹵獲サレタパンフレットノ一部ニハ持主ガ「米英門ヲ表示スル符號ヲ記入シテ居ルモノモアル。

64

部外秘

南洋ニ於ケル將兵ニ告グ

「南海派遣軍司令部

一九四一年／昭和十六年／十一月十五日

「堀井部隊參謀ノ教育パンフレット第一號

「附隨パンフレット「南洋ニ於ケル將兵ニ告グ」

ニ關スル訓示

「麾下ノ全部隊及軍馬ニ告グ」

「此ノパンフレットハ前ニ配布サレタ「勅諭集」

附隨ノ「戰陣訓」及「本書ヲ讀ミサヘスレバ戰

ハ勝ツ」ト共ニ戰場ニ於ケル士氣ヲ實際上高揚

スル爲ノ資料トシテ用ユベキモノデアル。

一九四一年（昭和十六年）十一月十五日

南海派遣軍指揮官

堀井 富太郎

「南海派遣軍ノ編成及戰地ニ向テ出發ニ際シ

天皇陛下ノ下自分ノ指揮下ニアル將兵及軍馬ニ

與フル訓示

「天皇陛下ノ御命令ニ從ヒ予ハ今ヤ一獨立部隊ト

シテノ貴下等ノ名譽アル部隊ヲ指揮シ而シテ重

要ナル任務ニ就カントス。予ハ深キ感銘ヲ抑フ

部外秘

南洋ニ於ケル將兵ニ告グ

「南海派遣軍司令部

一九四一年／昭和十六年／十一月十五日

「堀井部隊參謀ノ教育パンフレット第一號

「附隨パンフレット「南洋ニ於ケル將兵ニ告グ」

ニ關スル訓示

「麾下ノ全部隊及軍馬ニ告グ」

「此ノパンフレットハ前ニ配布セラレタ「勅諭集」

附隨ノ「戰陣訓」及「本書ヲ讀ミサヘスレバ戰

ハ勝ツ」ト共ニ戰場ニ於ケル士氣ヲ實際上高揚

スル爲ノ資料トシテ用ユベキモノデアル。

一九四一年（昭和十六年）十一月十五日

南海派遣軍指揮官

堀井 富太郎

「南海派遣軍ノ編成及戰地ニ向テ出發ニ際シ

天皇陛下ノ下自分ノ指揮下ニアル將兵及軍馬ニ
與フル訓示

「天皇陛下ノ御命令ニ從ヒ予ハ今ヤ一獨立部隊ト
シテノ貴下等ノ名譽アル部隊ヲ指揮シ而シテ重
要ナル任務ニ就カントス。予ハ深キ感銘ヲ擲フ

ルコトヲ得ズ。予ノ責任ノ重大ヲ痛切ニ感ズ。
 「東亞ヲ國ル國際狀勢ハ未曾有ノ危機ニ直面シ帝國ノ運命ハ洵ニ豫測ヲ許サヌモノガアル。予ハ貴下等全員ガ常ニ勅諭ヲ肝ニ銘ジ上官ノ命ニ從ヒ全力ヲ盡シテ奮闘セルコトヲ知悉セリ。然レドモ貴下等ノ部隊ガ新タニ編成サレ戦地ニ赴カントスルニ當リ貴下等ハ充分ナ勇氣ヲ揮ツテ次ノ三大原則ヲ遵守スヘシ。

「軍紀ノ嚴守、軍人精神ノ強化、必勝ニ對スル決死奮闘ノ信念、貴下等ガ高級將校ノ指揮下ニアルトスルモ又ハ下僚ノ指揮下ニアルモ、貴下ガ將校或ハ軍士トスルモ忠義ノ精神ニ徴シ且ツ上下一体トナリ陸海軍ノ協同作戰ニ自信ヲ持テ且協力スルヲ要ス。斯クシテ貴下等ハ派遣軍ノ協同戰力ヲ發揮スル爲ニ貴下等ノ訓練ノ效果ヲ活用スベク貴下等ノ最善ノ努力ヲ要請スル。

「貴下等ハ各自ノ健康ニ留意シ予ノ訓示ヲ心ニ留メ戰闘開始ニ當リテハ速カニ終戦ノ目的ノ完遂ヲ期シ聖慮ヲ安ンジ奉リ、派遣軍ノ眞價ヲ愈々益々昂揚スルノ決意ヲ固メンコトヲ望ム。

「以上ハ予ノ訓示ナリ。

南海派遣軍指揮官

堀 井 富 太 郎

「南海派遣軍將兵へノ諭告」

一九四一年（昭和十六年）十一月十五日

「將ニ來ラントスル戦争ノ目的ハ大元帥陛下ノ御後成ヲ世界ニ光被シ大東亞共榮國ノ建設ヲ完遂スルニアリ。我々ノ大使命ハ支那羣島ノ處理及此等地域ニ廣汎ニ皇威ヲ擴大スルコトヲ妨害スル□□□□ノ企圖ヲ一擊ノ下ニ粉碎スルニアリ。我々皇軍ニ取ツテ偶發的誤算若クハ油斷ノ爲ニ皇威ノ意義ヲ損シ皇威ノ尊嚴ガ冒瀆サルルガ如キコトアラバ斷ジテ許スベカラザルトコロナリ。」

「陛下將兵ガ皇軍ノ使命ヲ肝ニ銘ズベキコトハ言ヲ俟タズ、而シテ征伐中ハ軍人ニ賜ハリタル勅諭ヲ怠ラズ拜誦スルヲ要ス。」

南海ニ於ケル將兵ニ對スル本諭告ハ今ヤ重大ナル任務ヲ有スル派遣軍將兵及軍屬ニ對シ軍紀ニ關スル戒訓トシテ與ヘラルルモノナリ。

「(一)非戰人員ヲ無益ニ殺傷ス可カラズ。一戰國ニ於テハ我々ハ勇氣ト決斷ヲ以テ敵ヲ壓倒シ且粉碎スルヲ要ス。然レドモ武器ヲ棄テ降服シタル者ヲ與害ノ余リ殺傷スルガ如キハ日本武士道ノ精神ニ反ス。特ニ東亞ヲ再建スル爲我々ハ原住

民ヲ將來指導セザルベカラズ。無益ニ無抵抗ノ
 原住民ヲ殺傷スルガ如キハ皇軍ノ名譽ヲ毀損シ
 且我々ノ使命ニ反スル無價値ノ行爲ナリ。然リ
 ト雖モ貴下等ハ讓レル憐憫ノ爲敵ニ欺カル可カ
 ラザルハ無論ノコトナリ。南海派遣軍ニ於ケル
 將兵ノ間ニ忠義ノ道ニ外レルガ如キモノ單一人
 モアル可カラズ。

「(二)如何ナル場合ト雖モ掠奪及婦人ニ對スル暴行
 ハ許サレズ。一斯カル實例ハ稀ナリシトハ雖モ
 戰勝ノ餘勢ニ驅ラレ無益ニ人家ニ侵入シ家財ヲ
 破壊シ掠奪スルガ如キハ皇軍ノ名譽ニ掛ケ痛恨
 事ト云ハザルヲ得ズ。極端ナル例トシテハ婦人
 ヲ凌辱シタルガ如キ不埒ナル者サヘアリタリ。
 被害者ガ白人ナルト原住民ナルトヲ問ハズ、而
 シテ原因ノ如何ヲ問ハズ南海派遣軍ニ於テハ斯
 クノ如キハ斷ジテ許サレザル所ナリ。我が派遣
 軍ハ軍紀ヲ嚴守シ凡ユル部面ニ公德ヲ尊重シツ
 ツ前進セザルベカラズ。而シテ皇恩ノ宏大無邊
 ナルヲ望マル、皇恩ヲ奉戴シ、全將兵ハ峻嚴ニ
 交ユルニ寛容ヲ以テシ只皇恩ノ實現ニ努力ス
 ルヲ要ス。陰慘ナル人々ト婦人ト雖モ凡テ我
 南海將兵ノ仁情ヲ以テ感激セシメザル可カラズ。

「(三)敵地域ノ建物資材等ハ許可ナクシテ放火スベ

カラズ。一鹵獲財産が火災並ニ其他不慮ノ災害ヲ蒙ルコト屢々アリ。之等ハ主トシテ敵軍退却中ニ生起ス。然レ共占領軍ノ不注意若クハ隣國ノ興奮ニ依リ惹起サレタル事件モ無キニシモ非ズ。原因ノ如何ヲ問ハズ斯カル行爲ハ一般住民ノ間ニ物資不足ニ因ル苦痛ヲ與フルノミナラズ彼等將來ノ宣撫ヲ困難ナラシメ我が軍隊ノ宿營ニモ重大ナル支障ヲ與フ、如何ナル時ニ於テモ如何ナル場所ニシテモ火災ハ社會上ノ悲劇ナリ。我が南海將兵ハ豫メ敵ニ備ヘ敵ヲシテ斯カル破壞行動ヲ行フコトナカラシムルヤウ努力シ以テ其勇猛ヲ示スヘキナリ。

「(四)間諜ニ對スル安全ト防止ヲ周到ニスベシ。一不注意ハ最大ノ敵ナリトハ軍ノ秘密ヲ保護スルニ付特ニ眞實ナリ。殊ニ我々が將來ノ作戦ヲ考フル時、一言一動ハ皇軍全体ニ對シ洩ルベカラザル結果ヲ及ボスモノナリ。聞者ハ常に我身近ニ在リ。而シテ間諜ヲ防止スルニハ「見ザル、言ハザル、聞カザル」ニ優ルモノナシ。一片ノ紙片、日常挨拶ノ偶然ノ一言ガ重大ナル結果ヲ生ズルコトアリ。

今回ハ特ニ既ニ告知サレタル通り作戦ノ遂行中

ハ勿論、乗船以前ト雖モ一通ノ稟書サヘ許可サレズ。上官ハ部下ノ監督ヲ嚴ニシ部下ハ上官ニ服従スルヲ要ス。將兵ハ流言ニ迷ハサレルコトアルベカラズ。斯クノ如ク各自相信シ相戒メ以テ我が南海派遣將兵今同ノ任務ハ軍機ノ嚴守ニヨリ祖國ト家庭ニ忠實ナルヲ要ス。

〔五〕彈藥ト資材ヲ大切ニセヨ―貴下等ノ私物ヲ減ゼヨ―我が派遣隊ハ長期間ニ亘リ獨立シテ戰鬥セントシ後方ヨリノ補給ハ極度ニ困難トナラン。壹發ノ彈丸、壹本ノ竹棒モ全部隊ノ戦力ニ影響ヲ與ヘ得ル。今次戰鬥ノ本質ニ鑑ミ單ニ武器彈藥ノミナラズ、度々凡テノ資材ノ注意深キ保存ト使用節約ニ對シ深甚ナル考慮ヲ拂フコトヲ要ス。他方、異國ノ記念品ヲ私シ、生還ヲ期セザル軍人精神ヲ没却スル者ハ其ノ戰鬥能力ヲ減殺スルノミナラズ、正當ナル購入ト掠奪トノ區別ヲ往々ニシテ混淆シガチガリ。故ニ斯カル物品ノ携行ハ嚴重ニ禁ゼラル。

〔忠節ト自制ヲ誓ツタ我が南海ノ將兵が更ニ一層其ノ士氣ヲ昂揚出來ルヨウ此ノ誓告ト訓示が與ヘラレタ。

〔以上述べし所ハ凡テ御勅諭ノ趣旨ニ基クノデア。全員ヲシテ遵養ヲ嚴トシテ擁護シ、且世界

Doc 1628

ニ對シ國威ヲ發揮セシムル爲、吾人ハ各員ガ熟考シ、遵守シ得ルヤウ特ニ諒解シ易クシカモ侵シ易キ例ヲ與ヘタ。斯クノ如ク軍紀ヲ維持スル部隊ハ常ニ戰ニ於テ勝利ヲ得。貴下等ハ皆祖國ノ爲戰線ニ赴カントシテキル。万一何人カが過失ヲ犯シ、或ハ罪科ノタメ審問セラレ、ガ如キコトアラバ獨リソノ家族並ニ郷黨ノ希望ヲ裏切り、ソノ將來ヲ暗黒ニシ、且彼ガ築キ上ゲシ戰功ノ記録ヲ空シクスルノミナラズ、彼ノ行爲ハ他ノ方面ニ於ケル部隊ノ名譽ヲ傷ツケ聖戰ノ完遂ニ惡影響ヲ及ボス。斯クノ如キハ誠ニ痛歎スベキコトデアアル。

親愛ナル南海ノ將兵ヨ、以上ノ事ヲ銘記セヨ。」
〔聯合國翻譯通譯部、鹵漢文書第八九號、自第一頁至第四頁〕

上記第十項ニ引用サレタル南海派遣隊ハ一九四一年ノ昭和十六年ノ十一月十五日マデニ陸軍少將堀井富太郎ノ指揮ノ下ニ既ニ組織サレテ居タ。此ノ特別編成特名派遣隊ハ、一九四一年ノ昭和十六年ノ十二月十日「ガム」ヲ攻襲シ、後ニ「ラバウル」及「ニューギニア」ニ轉進シタ部隊ヲ構成シタ。

〔聯合國翻譯通譯部敵國刊行物第四一號第十頁〕

十一月九日／昭和十六年十一月十六日

海軍少尉中村俊雄ノ將校手帳ニ次ノ章句アリ。

「私ガ乗艦シタ際ノ我ガ艦長ノ演説ハ

「一九四一年／昭和十六年十一月十六日（重巡洋艦「加古」ノ）海軍大佐高橋勇次ニ依ツテ爲サレタ。

「三年間諸士ハ己ノ部署ニ付勤勉ニ練磨シ來ツタ。予ハ、諸士ガ今此處ニ、戦線ニ立ツニ當ツテ諸士ノ心情ハ切迫シタ事態ヲ感ジテ昂揚セラレツ、アルト信ジル。

「諸士ガ此ノ切迫セル事態ニ想ヒヲ致ストキ是ハ演習デハナイトイフコトガ了解シ得ル。諸士ハ今ヤ戦場ニ立ツテキル。諸士ノ指揮ヲ擔任スル士官ト其ノ補助官ガ選定セラレタ。然シ實際ノ處、彼等ハ皆自己ノ戦闘部署ヲ持ツテ居ルノテ諸士ノ指圖ニ其ノ全幅ノ注意ヲ傾ケルコトハ出來ヌデアラウ。予ハ、諸士ガ現在ノ状況ヲ理解シ、余リ多ク他ニ依頼シナイコトヲ確信スル。諸士ハ剛健ナル進取ノ精神ヲ以テ斷乎ソノ任務ヲ遂行セネバナラヌ。更ニ、此ノ際特ニ「常ニ己ノ部署ヲ守レ」トイフ誠ヲ強調セネバナラヌ。兵科將校ハ如何ナル事ガ惹起スルモ處理シ得ル甲板上ニ常ニ在ルコトハ極メテ重要ナコトデア

ル。要之、現在ノ情勢ハ確ニ其ノ極點ニ近ヅキツ、アル。眞ニ其ノ最モ意義深長ナル段階ニアル。予ハ諸士ニ對シテ異常ノ決心ト努力ヲ衷心ヨリ希望スル。

(ТИЦПОА 翻譯、項目第九八六號第一頁第六七頁)

十一月十九日/昭和十六年/十一月十八日

歩兵第四一聯隊第三大隊ノ上等兵山下所有ノ日記ハ次ノ記事ヲ記載ス。

「一九四一年/昭和十六年/十一月十八日/私ハ思ヒ出多キ上海ヲ十五時三十分頃離レタ。ソシテ目的地「キアチング」ヲ目指シテ十七時三十分舊臘丸ニ乗船シタ。旅團ハ機械化部隊トシテ益々其ノ能率ヲ昂揚スル爲機動作戦的ニ展開セラレタ。我等ハ情勢ノ緊迫ヲ痛切ニ感ジテ居ル。ソシテ命令ハ遂ニ來タ。戦方ヲ發揮スベキ時ハ遂ニ我々ニ來タ。我々ハA、B、D、三ヶ國ト戦ヲ開始セントシテオルノテアルカ。(文字ハ原文ニ於テ英語ヲ以テ書カレテキル。)重大ノ緊張感ヲ以テ私ハ、我々が今戦地ニ向ツテ出發シタトイフ事實ハ日本有史以來ノ最大ノ喜ブベキ事件デアルコトヲ知ル。

「十一月二十一日/高雄ノ見エル所ニ投錨シタ。」
(聯合國翻譯通譯部、現年度翻譯第四五號第二七頁)

Doc 1628

一九四一年／昭和十六年／十一月二十二日

機動部隊出航ス

航空母艦加賀乗組員ノ一人トシテ眞珠灣攻撃ニ参加シタ三等水兵、俘虜横田シゲキ（JAL100037）ハ右攻撃作戦ニ關シ次ノ如キ年表ヲ與ヘタ。再質問ヲ受ケテ此ノ俘虜ハ後記第十六項Bニ於テ陳述セラレアル如ク彼ノ時ニ對スル判斷ヲ訂正シタ。凡テノ時間ハ日本時間デアル。

機動部隊ノ集合。

機動部隊ハ海軍中將南雲忠一ノ指揮ノ下ニ一九四一年／昭和十六年／十一月ノ中頃千島群島中環提島ノ「單冠灣」(俘虜ハ「ヒトカツブ灣」ト述ベタ)ニ集合シタ。航空母艦「加賀」ハ十一月七日佐世保ヲ出航シ、九州ヲ南下シ日本ノ東沿岸ヲ北上シテ一九四一年／昭和十六年／十一月十五日ニ「單冠灣」ニ到着シタ。航空母艦「蒼龍」、三隻ノ油槽船及一隻ノ補給船ガ十一月十六日到着シタ。航空母艦「瑞鶴」、「翔鶴」ノ二艦ガ十一月十七日到着シタ。艦「比叡」及「霧島」、航空母艦「赤城」及「飛龍」重巡洋艦(俘虜ハ利根級ト考ヘタ)並ニ貳隻ノ駆逐艦ガ十一月二十日以前ニ「單冠灣」ニ到着シタ。三隻ノ伊號潛水艦ガ「單冠灣」カラ出發ノ際機動部隊ニ

Dec 1628

加ハシタ。

「往流ハ次ノ遅リデアル。

「機動部隊ハ一九二一年ノ昭和十六年ノ十一月二十
十二日十四時出流シタ。一一一部隊ハ十二月四日マ
テ東ニ進行シタ。ソレカラ針路ハ前ニ轉セラレタ。
部隊ハZ字形進行ヲシナカツタ。速力ハ十三節デア
ツタ。日本時間ガ終始守ラレタ。一一一十一月二十
八日加賀ハ第二警戒配備ヲ執ツタ。砲員ハ二直営直
ニ編メラレタ。一ハ爾後暗クサレタ。

「十二月二日、加賀ノ艦長岡田次作大佐ノ晉昇ノ
ハ本艦乗組員ニ對シテ訓示ヲ與ヘタ。彼ハ、天皇陛
下ガ聯合艦隊司令長官ヲ召サレテ十二月八日米國ニ
對シテ戰ヲ宣セラレル旨彼ニ告ゲタト公表シタ。「
加賀」ハ今ヤ布陸ニ向ツテ進路ヲトツテキル。ソシ
テ土曜日午前一時、飛行機隊ハ真珠灣攻撃ノ爲發艦
スル豫定ナリ。一一一一」

「機動部隊ハ十二月四日南ニ針路ヲ變更シタ。一一
一一一一」

(聯合國翻譯通譯部、新聞報告書、這續、第二三〇
號自第二頁至第七頁)

75

十四一九四一年ノ昭和十六年ノ十一月二十三日

ハ戰争勃發以前ノ狀況

「戰争勃發以前ノ兩國ノ第三段階」(發出官應不

Doc 1628

明)ト題スル一九四一年ノ昭和十六年ノ七月一十二月
附文書ノ部分的翻譯ガ下ノ如ク述ベラレテキル。引用
サレタ部分ニハ日附ガ無イガ一九四一年ノ昭和十六年ノ
十一月二十三日以前ノ日附タルコトハ内部ノ證據ニ依
リ明白テアル。田中派遣隊ハ一九四一年ノ昭和十六年ノ
十二月十日「アパリ」附近ニ上陸シタ。

「四田中派遣隊ハ十一月二十三日、二十三日ノ間ニ
高雄ニ於テ乗船ヲ開始スル、乗船計畫ハ添附書ニ示サ
レテアル通りテアル。

「十一月二十六日零時以後、右派遣隊ハ第十四軍指
令官本間雅晴陸軍中將ノ直接指揮ノ下ニ入ル。右軍ニ
新ニ配屬サレタ部隊ハ十一月二十六日零時一分以後田
中派遣隊ノ指揮下ニ入ル。—————

「準備ハ遂ニ完了サレタノテ、田中派遣隊ヲ輸送ス
ル護送船團ハ護衛艦ノ直接指導ノ下ニ澎湖列島ノ馬公
鑛道カラ七日十七時出航シタ。台湾海峡ノ荒濤ヲ航海
中、將兵ハ元氣デアツタ。敵機或ハ敵潜水艦ニハ遭遇
シナカッタ。

「夕刻「スコール」ガヤツテ來タガ護送船團ハ航行
シ續ケタ。皆ハ準備ガ出来タ、ソシテ敵ト遭遇スルコ
トヲ切望シタ。」

(聯合國翻譯通譯部、現年度翻譯第四六號頁第二頁至
第三頁)

76

十三年一九四一年/昭和十六年/十一月二十六日

イ、真珠湾ヲ攻撃セヨ

「艦隊」ノ乗組員ノ一員トシテ真珠湾攻撃ニ参加シタ停泊河北克己 (JANUS) 一四七九八七) 言ハ右作戦ニ關スル次ノ如キ記事ヲ書イタ。彼ノ書イタ記事ハ追加訪問ニ依リ數個ノ細目ノ點ニ於テ補足セラレタ。

「母港ノ數々ノ愚ヒ出ヨ、サヨウナラ、十一月十五日横須賀港ヲ出航後我が精銳第十八艦隊ハ艦隊「不知火」ヲ先登ニ「霞」、**「霞」**、及「陽炎」之ニ從ヒ千島列島「ヒトカツブ」灣(單冠)ニ直接前進シタ。

「二十一日拂曉我々ハ目的地「單冠」灣ニ入ツタ。其ノ翌日航空母艦、驅逐艦及他ノ艦ガ同灣ニ入ツタ。此處ガ我が帝國海軍ガ歴史上最大ノ作戦艦隊ヲ編成シタ場所デアル。

「二十六日ノ朝作戦指揮官海軍中將南雲忠一中將ハ「真珠湾ヲ攻撃セヨ」トノ簡單ナ命令ヲ發シタ。

「新クシテ、我々ハ艦隊ヲ後ニ太平洋ノ荒波ノ中ヲ前進シタ。我々ノ前進ハ驅逐艦「鷹」ヲ先登ニ第十六驅逐隊、驅逐洋艦「阿武隈」、駆艦「比叡」、空母「赤城」、「加賀」、「瑞鶴」、「翔鶴」、「蒼龍」、及「飛龍」、駆艦「霧島」、第十八驅逐隊、二隻ノ潜水艦、一隻ノ重油槽船ガ陸續トシテ是ニ從ヒ兩側面ニ

Doc 1628

ハ重巡洋艦「利根」及「筑摩」ガ進行シタ。

「先ツ第一ニ驅逐艦ガ實弾ヲ發射シ、巡洋艦數艦相次イテ發射シ、夕暮、空母カラ飛行機ノ離着陸ノ實施ヲ以テ終ツタ。北太平洋上針路ヲ東へ取り荒天ト荒海ノ中ヲ航行スルコト十日以上ノ後我々ハ遂ニ布哇眞珠灣ニ近附イタ。

「十二月八日拂曉、我々ハ布哇群島ノ沖合四百キロメートルノ地點ニ到着シタ。太陽ガ出タトキニ大空ハ晴レ海ハ靜カテアツタ。天候ハ恰モ「大和」ノ飛行機ノ偉大ナ最初ノ勝利ノ爲ニ接應サレタヤウニ良好デアツタ。

「戦國旗ガ旗「赤城」ノ旗ニ上ツタトキ艦機ガ相次イテ各空母ノ甲板ヲ離レタソシテ約三百機ガ壯麗ナ編隊ヲ組ンデ眞珠灣ノ方向ニ消エタ。直ニ輝ク成功ノ報ガ入ツテ來タ。

「再ビ約二百ノ艦上攻撃機及戦國機ヨリ成ル第二ノ攻撃部隊ガ征服スベク勇敢ニ出發シタ。

「「「「「更ニ他ノ偉大ナ輝カシキ勝利。然シ此ノ榮光ノ背後ニ皇軍ノ神靈ナ數々ノ犠牲ノ思ヒ出ガアルヲ誰ガ知ルデアラウ。約十五機ノ飛行機及五隻ノ特殊潛航艇ガ歸還シナカッタ。僅ニ敵ノ飛行艇一機ガ攻撃シ來ツタノミデアル。

「新クシテ各艦ハ同時ニ歸航ニ就イタ。母港へノ途

Doc 1628

中我々ハ「ミッドウエイ」「ガム」ヲ無事ニ通過シタ。
ソシテ二十日ノ夜、祖國ノ島々ヲ見タ。

「私ハ各人ノ目ニ浮ンダ自然ノ涙ヲ回想スルコトガ
出來ル。誰モガ請求シテ止マヌ祖國ノ永遠ノ安泰ヲ所
願スル精神コソ日本人ナノデアアル。

「斯クシテ二十五日ニハ母港へ、ソシテソレカラ吳
海軍根據地ニ歸還シタ。

(聯合國翻譯通譯部 以前ニハ公表サレナカツタ訊問
書)

ロ、通常ノ航海ニアラズ

海上ニ於ケル一九四一年ノ昭和十六年ノ十一月二十
六日(水曜日)附テOgih 海軍報道部ニ依リ、編輯サレ
タ若干ノ報道及ビ正式公報ト共ニ添テラレタ海陸所屬
艦巡洋艦「香取」ノ艦長ニ依ル演說第二九號ハ下記ニ
述ベラレル。頁ノ一部分ハ燒カレタ。譯部ノ完全ナル
譯ハ次ノ通りデアアル。

「雙面亞ト日本トノ間ノ宣戰ガ不可避デアツタ三十
七年前明治天皇ハ、因テ起ル災禍ヲ避ケルタメ凡ユル
手段ヲ盡クサウト雙面亞政府ニ對シテ宣戰ノ布告ヲ再
考スルヨウ交渉シタ。我々ハ陛下ノ御仁慈ニ對シテ非
常ニ感謝シタ。

「最近來栖大使ガ米國ニ派遣ヲ命ゼラレター(私ハ
日艦隊爭前ノ上記ノ事件ト同シ目的ノ爲ニ彼ガ派遣サ

レタカ否ヤヲ知ラヌ。然シ少クトモ、私ハ彼ガ此ノ戦争ノ災禍ヲ防止セントスル天皇陛下ノ衷心ヨリノ御希望ヲ御傳ヘシタコトト信ズル。斯カル處置ガ我が帝國ノ傳統デアルコトハ明ニ知ラレテ居ル。

「然シ天皇陛下ノ御仁慈ニモ拘ハラズ米國ノ政治家ハ尊大デアリ、彼等ハ世界最大ノ國民ト考ヘ何物モ彼等ノ信念ヲ搖リ動カスコトハ出來ナイ。故ニ予ハ戦争ヲ防止セントスル野村、來栖兩大使ノ企ニモ拘ハラズ平和的解決ノ希望ハ無イト想像スル。

「結局、コノ成行ニ對應スル爲我々自身ノ武力ヲ行使スル以外ニ方法ガ無イ。此非常ノ時ニ際シ第六艦隊所屬ノ「香取」乗員タル我々ハ艦隊配置ニ於ケル我々ノ部署ニ就カントシテ居ル。單ニ潜水艦隊ノミナラズ空軍モ海上艦隊モ動員サレツ、アル。間モナク作戦行動ガ開始サレルデアラウ。

「我々が一日日出港シタ時ハ尋常ノ航海ノタメニアラズシテ全然異ツタ或ル事ノタメデアツタ事ヲ予ハ諸士ガ諒解センコトヲ望ム。此時ニ當リ予ハ、我々ハ今ヤ生涯ニ一度シカ來ナイ機會ニ廻リ合ツテ居ルコトヲ諸士ガ銘記センコトヲ望ム。

(聯合國翻譯通譯部敵國刊行物第六七號第一頁)

ハ、戰國地帯ガム島

歩兵第四十四聯隊員所有ト推定サレル日記中次ノ記

「一九四一年／昭和十六年／十一月十七日／本日部隊全員参加ノ上出征ノ爲閱兵式ガ舉行サル。……」

「十一月二十一日／前衛隊ハ朝出發シタ。軍旗ヲ捧ズル聯隊長ハ十三時頃出發シタ。」

「十一月二十三日／午前中降雨、我々ハ雨ノ中ヲ出發シタ。我々ハ十九時五十分朝倉停車場カラ出發シタ。」

我々ハ五時頃坂出ニ到着シタ。……
「十一月二十四日／坂出ヲ出發シタ。松江丸ハ十八時十分出港シタ。」

「十一月二十五日／我々ハ東ニ向ツテ内海ヲ離レ、ソレカラ東南ニ針路ヲ變ヘタ。……」

「十一月二十六日／我々ノ戦闘地帯ハ「ガム」島デアラウ。……朝私ハ甲板ニ出タソシテ左、右、後ニ運送船ヲ見タ。對空監視勤務ニ服ス。」

「十一月二十八日／十六時五十分頃母島ニ到着シタ。」

「十二月一日／午前中演習ヲ行ツタ。對空監視任務ニ就イタ。十五時頃船（譯者註。或ハ「敷船カ」）ガ動キ出シタ。二十二時上陸演習ノ爲起サレタ。一時再ビ起サレタ。七時頃我々ハ母島港ニ歸ツタ。……」

「十二月四日／朝宮城ノ譯者註、原文ハアツミヤソウトアルガソレハ朝宮城ノ間違、思フノ方向ニ向ツ

テ万歳ヲ唱ヘタ。ソシテ母島ノ港ヲ離レタ。九時三十分我々ハ基地ニ向ツテ東南ニ進行シタ。我々ハ宣戰ヲ告ゲル命令ヲ受領

82

Doc 1620

シ。○ 後々八十日ニ某地ニ上陸ノ豫定デアル。 | | | |
| | | |
（聯合國翻譯通譯部函發文書第九八號自第一頁至第三
頁）

一六一九四一年十一月二十七日

イ、機動部隊進路ノ地圖

第一圖ノ如ク複製サレタ日附不明ノ鹵獲地圖ハ其ノ後眞珠灣ノ攻撃ヲ敢行シタ機動部隊ノ「擇捉島」出發ノ日ヲ一九四一年十一月二十七日ト立證シテキル。此ノ地圖ノ發行責任者記入ナキモ其ノ出所ハ明ニ官憲デアアル。

(SOPAC 譯、連續第〇一四八〇號、項目第六四三號)

ロ、機動部隊「單冠」ヲ出發ス。

俘虜、横田シゲキ(J.A. 一〇〇〇三七) (上記一三a項ニ引用セル情報ヲ與ヘタト同ジ俘虜)ハ再訊問ノ結果眞珠灣作戰期間中ノ機動部隊ノ豫定時間表ニ對スル彼ノ所見ヲ次ノ通り修正シタ。

「一九四一年十一月十五日」航空母艦「加賀」ハ佐世保ヲ出港シタ。九州ノ南ヲ進航シ日本ノ東海岸ヲ北上シタ。

「十一月二十二日」戰艦「比叡」、「霧島」及ビ空母「赤城」、「飛龍」ガ千島列島「擇捉島」ノ「單冠」ニ到着シタ。

「十一月二十三日」航空母艦「加賀」ガ「單冠」ニ到着シタ。

「十一月二十四日」航空母艦「蒼龍」、「單冠」

ニ到着。

「十一月二十五日」航空母艦「瑞鶴」及び「翔鶴」ガ「單冠」ニ到着シタ。

「十一月二十七日」機動部隊ガ布哇方面ニ向ツテ「單冠」ヲ出港シタ。出港ニ際シ三隻ノ潜水艦ガ是ニ加ハツタ。

「十一月二十八日」「加賀」ハ第二警戒配備ヲ執ツタ。ソシテ對空監視哨ガ配置サレタ

(聯合國海軍通譯部新聞報告書、連續第二六八號)

ハ、攻撃ノ通知ヲ受ク。

俘虜、古河マサユキハ次ノ如ク陳述シタ。

「彼ハ真珠灣攻撃ニ參加シタトキ航空母艦、「翔鶴」ニ乗艦シテキタソシテ次ノ如ク説明シタ。(凡ベテノ時間ハ東京時間)

「一九四一年十一月二十日「翔鶴」ハ大分カラ「單冠」(俘虜ハ其ノ位置ニ付確信ヲ有セズ)ト呼バレル北方ノ錨地ニ向ケ出港シタ。「翔鶴」ハ二十五日頃到着シ、戦艦「霧島」、「榛名」及び航空母艦「加賀」、「赤城」、「飛龍」、「蒼龍」、「瑞鶴」其他二、三隻ノ巡洋艦及數隻ノ驅逐艦ヲ發見シタ。

十一月二十七日、二十八日、艦隊ハ「アリユー
 シヤン」列島ノ南方ノ北方航路ヲトツタ。十
 二月四日「翔鶴」ノ艦長ハ乗組員達ニ攻撃計
 ヲ打明ケタ。俘虜ハ彼ハ當時直グニ「アメリカ」
 ノ反撃ノアル事ヲ恐怖シ心配シタト言フ十二月
 五日夜艦隊ハ針路ヲ南へ轉ジタ。

戦闘配備ハ十二月七日二十三時ニ發セラレタ
 飛行機隊ハ八日二時離艦シタ。

(JICPOA豫備審問報告書七號、書類ADM-101011
 二、一九四四年一月十日 五―六頁)

一九四一年十一月二十八日

イ、重大氣配

二等水兵、上村常也(音譯)ノ日記中ニ左ノ記
 事が記入サレテアル。

「一九四一年十一月二十二日―午後横濱ニ行
 ク、有馬丸ニ夕食ニ招待サル」

「十一月二十四日―十四時出航。我々ハ南方
 トラツク島へノ直接航路ヲ取リツツアルト噂サ
 ル。港外デ「氷川丸」ヲ望見セリ。

「特ニ今回ノ航海ニハ平素ノ航海ニハ稀ナル
 重大氣配ガ漲ツテ居ル。電報爲替ニテ十圓ヲ受
 取ル。自分ハ今後可成リノ期間我々ニ俸給支拂
 ハナカルベシト推測ス。」

Dec 1628

87

「十二月二日、九時「トラツク」島ヲ出航
「クエジエリン」島ヘ向フ。我々ハ極雷ヲ銳意
警戒シツツ巡航セリ。今日ハ準備第五日目ニシ
テ設備ハ完了セリ。第六日ニハ海軍モ又同時總
攻撃ニ參加スル豫定トノ噂アリ。果シテ事實ナ
リヤ?

平靜ニ熟考セントスルモ自分ノ目ト躰ハ興奮ノ
色ヲ隠シ切レズ。

「十二月七日朝我が部隊ノ點檢終了後、艦長
ヨリ演説竝ビニ天皇陛下ヨリノ御傳言ノ奉讀ア
リ。八日午前一時ニ戰鬪開始サル可シト告ゲラ
ル。自分ハ日本ガ米英及ビ蘭領印度ニ對シ直戰
ヲ布告スルト聞キ大イニ興奮ス。慰問袋ガ分配
サル大イニ喜ブ。十九時我が艦ハ特務艇ヨリ別
レタリ。投錨後自分ハ「ビール」ヲ飲ミ酔ヘリ
(A T I S 時事雜誌 一、十三、十五頁)

ロ、「サマ」ヨリ馬來攻撃

第四十一歩兵聯隊一等兵、山川忠敏(音譯)
ノ個人記録中ニ左ノ記事ガ記入サレテアル。最
初ノ馬來攻撃ハ「サマ」ヨリ準備サレタモノデ
アル。

「一九四一年十一月二十八日、海南島「サマ」
港沖集結中「九州丸」カラ病院船ヘ移サル。

Doc 1628

「一九四二年一月一日ーベラク（音譯）ノカ
ンバル（音譯）ニテ所屬部隊ニ追ヒツク。

（A T I S 時事雜誌 六十四號十七頁）

一九四一年十一月二十九日

イ、「グアム」島攻撃

崎川隊（音譯）（第五十五輸送隊第二中隊）
ハ一九四一年十一月二十二日ー二十四日坂出ニ
テ「チャイナ」丸ニ乗船ス。一九四一年十一月
二十九日「チャイナ」丸船上ニテ崎川少尉ハ左
ノ作戦命令ヲ發シタ。

「崎作戦命令第二號

崎川 隊 令

十一月二十九日十五時

「チャイナ」丸

「本分遣隊ハ「グアム」島ヲ攻撃ス可シ（「グ
アム」ハ「インク」ニテ晝キ込マレタノデア
ル命令謄寫版刷リノ際ハ特別ナル島ノ名ハ空白ニ
殘サレテイタ。）

「グアム」島上ノ敵ノ狀況ハ特別見取圖（コ
ノ見取圖ハ當晝類ニハ含マレテイナイ）ニ於テ
示サレタリ。

「一主力（多分南分遣隊ノ主力ナラム）ハ
「ポートアブラ」ノ海岸基地ヲ占據シ一部ハ、

Doc 1625

「アガナ」市ヲ占據ス可シ。

「ニ主力（多分崎川隊ノ主力ナラム）ハマダ（多分マタノ事ナラム）海岸地區ニ上陸、一方一部ハ富田灣地區ニ上陸ス可シ。彼等ハ分遣隊ノ上陸ニ隨伴シ補給並ビニ輸送ノ役ヲ務ム可シ
「三第一小隊ハ富田灣ニ上陸シ塚本分遣隊ノ上陸ヲ援助ス可シ。

「四指揮小隊及ビ第二、第三小隊ハ楠瀬隊（音譯）ノ「マダ」海岸上陸ヲ援助ス可シ。

「五伊藤少尉（以下下士官一、兵三）ハ第二上陸團ト上陸シ中隊主力ノ上陸地點ヲ偵察ス可シ。

「六予ハ中隊ノ主力ヲ伴イ第三上陸團ト上陸シ爾後ノ前進準備ヲナサントス。

崎川少尉
「崎川隊」

（A T I S 書類、一九四一號二頁）

ロ、「グアム」島ニテ敵ト遭遇

所有者及ビソノ所屬隊名不明ナレド多分南海派遣隊員ノモノナラムト思ハル一日記中ニ左ノ記事ガ記入サレテアル。

「一九四一年十一月十八日十時ヨリ歩兵團ハ陸軍少將堀井富太郎ノ指揮下、演習ヲナス。

89

「十一月二十四日、六時三十分丸龜出發。

十五時三十分松江丸乗船。十八時出航。

「十一月二十八日十六時五十分、小笠原諸島

母島寄港。

「十一月二十九日、連絡ノ爲上陸「アメリカ」

ハ今迄變裝シテ居タノデアル。我々ハ勇氣百倍

「グアム」島ニ以テ迎ヘルタメ赴カントス。

「十二月三日、洗滌ノ爲二時三十分母島上陸

日米會談ハ遂ニ最後の決裂ニ至ルガ如キ形勢ナ
リ。

「十二月四日、八時三十分宮城遙拜ス。萬歳

三唱！演説アリ。日米戰！我々ノ今迄ノ辛苦モ

今ヤ報ハレントスル如シ！我々ハ昭和ノ御代ニ

生レシ甲斐アリ。人トシテ、コレニ勝ル幸アラ

ンヤ！艦送船ノ航路！九時、母國ニ榮アレ！

「十二月四日、十四時二十二分母島着。

「帝國ハ米、英及ビ蘭トノ戰ヲ決定シタリ。南

方地區軍隊ハ十二月八日攻軍開始後速カニ比律

賓諸島、英領馬來及ビ蘭領印度ノ要地ヲ占領ス

可シ。

「營目的ノ爲第一次日米空軍ガ行ハル可シ。

「南海派遣隊ハ第四機隊ト「グアム」島占據

ニ協カス可シ。若シ特別ノ命令ナキ時ハ十二月

十日ニ上陸ヲ行フ可シ。

「編弁作取命令イ、十七號、各部隊ハ既ニ發セラレタル命令イ、七號ニ從ツテ行動ス可シ。

「十二月八日 十一時 宣諭布告サル！

(ATTIS 時事 六四號一頁)

ハ、「タロ」海上陸

所有者及其ノ所屬部隊名不明ナレド多分南海派遣隊員ノモノト思ハル一日記中ニ左ノ記事ガ記入サレテアル。

一九四一年十一月二十九日ノ記事ハ「グアム」島「タロフオ」海北方ノ日本軍上陸ヲ推測シタモノデアル。崎川隊上陸地下シテ右ノ十八節(イ)ニ於テ言及セラレタルマダ或ハマタ海岸ハ「タロフオ」海ノ真北ニアル。

「一九四一年十一月二十二日一三時二十七分 坂出到着。十時。「チェリボン」丸ノ査閲巡視

「十一月二十三日一十七時。坂出出航。

「十一月二十七日「ボニン」諸島ヲ望ム。八時母島着。

「十一月二十八日一十九時。横濱丸へ連絡ニ赴ク。

「十一月二十九日一午前中、電氣發動機舟艇乗船ノ訓練。大隊ハ「タロ」海ノ北側ニ上陸ス

Dec 1628

92

ル事ニ決定サル。(譯者註「多分「グアム」島
「タロフオフォ」ノ事ナラム)

「十二月二日」二十時ヨリ投錨地突破訓練

「十二月三日」大隊將校ハ九時ヨリ横濱丸上
ニ於テ會合ノ豫定。硝煙ト瓦斯訓練。中隊指揮
官ノ會議デ「イリヤ」船ニ上陸スル事ニ決定シ
タ。一等巡洋艦二隻我等ノ護送ノ爲投錨地點ヘ
來タ。大イニ我等ニ安全感ヲ與フ。

「十二月四日」護衛艦ハ九時出航。

「十二月六日」「サロン」ニテ日本ノ「ニユ
ース」放送ヲ聴ク。我等ノ使命ハ米國ヲ攻撃ス
ルニアル。

(A T I S 時事秘録 五十二號三十一頁)

ニ、休暇 取消

「バラオ」第三防備隊員、并藤(音譯)所有
ノ日記中ニ左ノ記事ガ記入サレテアル。

「十一月二十九日」戦争? 休暇ハスベテ取消
サレタ。大陸軍部隊ガ附近ニ出動中デアルトノ
噂ヲ聞ク(「バラオ」ニテ書カル)

「十二月五日」第三根據地司令官ヨリ我々ハ
第二營戒配備ニ就ク可シトノ文書命令ヲ受ク正
ニ事重大ニ至ラントス。

「十二月六日」米軍飛行機ガ我々ノ配備ヲ偵

察中トノ事ナリ

「十二月八日」米英ニ宣戰布告サル

(A T I S 報 五二七號八頁)

一九四一年十二月一日

イ、砲撃計畫

台湾基隆港ニ於テ十二月一日第四十八野戰對空防禦部隊ニヨリ發セラレタル射撃計畫ハ特ニ左ノ注意事項ヲ強調シテ居ル

「大隊ハ空襲ニ對シ基隆陸軍航空防禦隊ト協カス可シ。全部隊ハ基隆碇泊所ヲ保護スル爲能フ限リ港外遠方ニ於テ敵機ヲ撃墜スル極努ム可シ」

(A T I S 敵例刊行物十一號八、十頁)

一九四一年十二月二日

イ、日本戰爭ヲ決定ス

所有者及ビソノ所屬部隊不明ノ一日記中ニ左ノ記事ガ記入サレテアル

「一九四一年十一月二十四日坂出ニテ日本郵船會社ノ大福丸(三、五二三ト)ニ乗船ス

「十一月二十六日」羅遜船「卯月」ガ我等船送船ヲ護衛中ナリ

「十二月二日」母島ニテ軍馬ヲ積ム

「十二月四日」南海派遣隊司令官、堀井富太

Dec 1628

94

郎ヨリノ命令

「十二月二日、日本帝國ハ英國、米合衆國及
ビ和蘭トノ戦ヲ決定セリ。日本帝國ハ十二月八
日ニ合衆國ニ對シ第一次空軍攻撃ヲ行フデアラ
ウ。當分遣隊ハ若シ特別ノ命令無キ時ハ「グア
ム」島ニ上陸ス可シ

(A T I S 時事雜譯二十三號 四〇頁)

ロ、比島上陸

第一海軍特別上陸部隊、吉本隊所屬、西村春
一(音譯)ノ日記中ニ左ノ記事ガ記入サレテア
リ。

「十一月七日」徴兵サル

「十一月三十日」宇品ニテ霧島丸ニ乗船ス

驅逐艦三十六號及ビ三十七號ニ依リ護送サル。

「バラオ」ヘ向フ

「十二月二日、」ラデオ」ニテ「アメリカ」

艦隊(五隻)ガ出港セリト聞ク。我々ハ「バラ

オ」ニ寄港ノ後比律賓諸島ニ上陸ノ豫定トノ事

ナリ

「十二月五日」「バラオ」着

「十二月六日」敵潜水艦ヲ五千米ノ彼方ニ望

見セリ

「十二月七日」日米關係益々惡化シツツアリ

Dec 16 28

「十二月八日午前八時宣戰布告サル

勝田丸沈没

(A T T S 報四七〇號 十五十六頁)

三一九四一年十二月三日

イ、敵機ヲ擊墜ス

「サマ」飛行場一九四一年十二月三日附第十七飛行聯隊作戰命令A-12號ヨリノ拔萃ニヨレバ左記ノ注意事項ヲ強調シテ居ル。

「第二飛行中隊ハ第七十飛行場中隊ト協力シ

「サマ」ノ防空ニ就クベシ。敵對行動ヲ取ル飛

行機ハ射チ落サルベシ」

(A T T S、書類一五三六三號)

Doc 1628

96

二十二、一九四一年十二月四日

南海派遣隊員濱野米吉ノ音譯ノノ日記中ニ左ノ記事カ記入サレテアル。

「一九四一年十月四日、十三時西部三十二部隊機隊へ臨時勤務ス可ク呼出サレタリ。ソノ後十一月十五日迄丸龜陸業學校ニテ待機セリ。丸龜中學校へ移レリ。」

「十一月二十二日十三時坂出ニテ乗船。夜間放船セリ。」

「十一月二十三日我々ハ大阪湾ニ投錨シ待機シ居タルラシク思ハル。夜間放船セリ。」

「十一月二十七日小笠原諸島父島港ニ入港ス。」

「十一月二十八日午前出港、同日母島入港、同港ニテ待機ス。」

「十二月四日米領グアム島占領ノ目的ヲ以テ母島出港。同日我方國ハ十二月八日英國、合衆國及ビ佛國ニ對シ宣戰布告スル事ヲ決定シタリ。」

「十二月十日二時當南海派遣（此ノ際間コソ爆撃セント待機シ居リタルモノ）ハ上陸命令ヲ受ク。爆撃ハ八日ニ開始サレタリ」

(A.I.S 時事雜誌四十八號、三十四頁)

第七十七飛行隊隊所存ノ「泰國作戰」ト題スル報告書綴中ニ次ノ敘行カ記入シテアル。

「一九四一年十二月四―七日第二十五時軍輸送船ノ護衛並ビニ泰國占領ノ準備」

(A T I S 報一五一八號三一四頁)

高森隊堀井隊(多分南海派遣隊ノ驛ナラム)ノ守上茂雄ノ音譯ノ所有ノ日記中ニ左ノ記裏ガ記入シテアル。

「一九四一年十一月二十二日―我々ハ懷シキ善通寺ヲ後ニ坂出ニ向ツテ出發。十九時三十分頃坂出港ヲ後ニ〇〇向ケ出發ス。

十一月二十三日―〇五〇〇頃船ハ停止シタ。

東ニ山ソノ麓ニ工場地帯ガ見エタ。

友達ハアレハ「センシユウジ」ダト云ツテキタ。

一九四一年十一月二十七日―小笠原諸島ノ「ツチ」島ニ〇一〇〇頃入港シタ。再ビ母島ニ向ケ一〇〇頃出港シタ。

〇頃出港シタ。

十一月二十八日―母島ノ「オキ」村小學校へ馬ヲ陸揚ゲシタ。

十二月三日―出港準備

十二月四日―グアム(PO R A M)島へ向ケ出港スル豫定。シカシグアム島ハ大宮島ト呼バレテキル

十二月五日―〇〇〇出港豫定、安全ニ航海中

十二月六日、安全ニ航海中、三日以内ニ上陸豫定
 一九四一年十二月八日、大本營、午後十二時三〇
 分英國並ニ合衆國ニ對シ宣戰ガ布告サレタ。
 午後高森大尉ヨリ布哇諸島ガ我方空軍ニヨリ爆撃
 中ノ旨聞イタ。比島及香港爆撃中八日午前八時ニ
 高森隊ハ宮城遙拜ヲシタ。終ニ九日〇八〇〇ヨリ
 上陸開始ノ豫定。八日ノ朝ニ初メテ島影ヲカスカ
 ニ望見ス。

(聯合軍翻譯通譯部 譯四九號三四頁)

部隊不明ノ小野新三郎ノ音譯ノ所有ノ日記中ニ左
 記ノ事項ガ記入サレテ居ル

一九四一年十一月二十二日、大阪出港

十一月二十四日、紀州港ヲ通過シテ船首ヲ「トナ
 シ」ノ譯者註、多分東南ノニ向ケタ。

十一月二十六日、小笠原諸島ニ上陸

十二月二十七日、小笠原島母島ニ上陸馬匹ヲ陸揚
 ゲンタ。

十二月、「ベニス」丸ニ歸船

十二月四日、「一〇・〇〇」目的地「グアム」へ出

發

(聯合軍翻譯通譯部捕獲書類第八二號一頁)

南海派遣隊防空隊ノ高橋分隊員高橋ヤイチ所有ノ日記ニハ左記ノ事項ガ記入サレテ居ル

一九四一年十一月十四日。我方隊ハ前線出動ノ命令ヲ終ニ受領シタ。七月廿八日。我方隊ハ懷シキ在朝鮮第七三部隊ヨリ分離シ第四七防空大隊トシテ再編制サレタ。十一月一四日。〇九〇〇練兵場デ最后ノ送別式ヲ舉行シタ。前線ヘ向ケ出發ノ時。淵山ノ音譯ノ司令官ハ訓示ヲ與ヘ宮城ニ對スル宣誓文ヲ朗讀シタ。私ハ命ヲ捨テテ戰死スル事ヲ厭ハナイ。最后ノ勝利ヲ祈ル爲メニ我々ハ「ゴク」神社ノ譯者註、ゴクハ護國ノ遺ト思フノニ行キ神格カラ御祈濟ヲ頂クシタ。ソレカラ万才ヲ三唱シ解散シタ。一九〇〇ニ乗車シタ。貨物列車デシタ。

約五〇名。皆シナ懷シイ合寧ヲ發ツ時待ツテキタ。十一月十七日。〇六〇〇ニ遂ニ釜山驛ニ着イタ。今日一日ハ釜山市ニ泊ツタ。

十一月十八日。本日ハ第一八〇部隊ガ出發スル。一三〇〇ニ積荷ハ終了シタ。二年振りデ我々ハ船ニ乗ツタ。船ノ中ハ前ニ乗ツタ時ト同ジデアル。暫クシア船ガ出航シテキルノニ氣ガツイタ。

十一月十九日。此處ハ日本ダ。二年振りデ日本ヲ

見ル。宇品デ「磯」部隊ノ音譯ノハ二隊ニ分レ
我々ハ皆シナ大キナ船ニ乗船シタ。私ハ高橋分
隊ニ配屬サレタ。船ハ松江丸デアッタ。
二十三日〇六〇〇、我々ノ目的地デアル坂出ニ
着イタ。一七三〇、終ニ出航シタ。何處ヘ行ク
ノカ我々ハ知ラナカッタ。二十八日一六三〇時
船ノ東北ニ大キナ島ガ見エタ。

我々ヨリ先ニ着イタ數隻ノ船ハ此ノ母島ニ居タ。
坂出ヲ出デカラ四日目デアッタ。

十二月四日一〇九三〇ニ遂ニ島ヲ出航シタ。直
ニ戦闘準備ニトリ掛カッタ。敵陣地ニ近ヅキツ
ツキアルノダ。十八日間ノ航海デアッタガ毎日
同ジ課程デアッタ。十二月十一日〇一〇〇時終
ニ敵ト相見ユ我々ノ使命ハグアム島ニ在リ。

(聯合軍翻譯通譯部時事翻譯六八號三二一三四
頁) 第四一步兵聯隊ノ某兵士ノ所有ノ日記ニハ
左ノ事項ガ記入サレテ居ル。

一九四一年九月五日一第四一步兵聯隊第一中隊
ニ配屬サル。大隊長森田中佐ノ訓示アリ。

十一月二十日、「アバヤマ」丸ニ乗ツテ吳淞ニ向フ。

十一月二十一日 吳淞出航南海ニ向フ。

十一月二十四日 海南島ノ最北端ニ着ク。

十二月四日、「サマ」ヲ出港海軍ニ護送セラレ
テ二十八隻ノ船團「シンカポール」ヘ向フ。

(聯合軍翻譯通譯 報告一三八號一二頁)

第一四四歩兵隊ノ森田「ユタカ」ノ所有ノ日
記並手帳ニ左記ノ事項ガ書カレテアル。

一九四一年十一月二十一日 一〇一四〇時

香川縣坂出港ニ到着 砲三門、馬匹五〇頭騎兵
工兵隊ノ一部山砲ノ一ヶ中隊並第九中隊ト共ニ
輸送船門司丸ニ乗船シタ。

十二月一日 午後。上陸用意。

上陸演習ヲ行フ一八〇〇時軍艦及輸送船ハ出航
用意ノ爲父島ヲ拔錨。

十二月二日 一〇三〇時、上陸裝備ニテ二時間
待機、然シ機動艇用意ナラズ上陸取消。待機並
輸送船ハ〇六〇〇及一三三〇ニ父島ニ碇港。軍
艦四隻。飛行機八機。再ビ馬匹ヲ積載ス。

十二月四日 一〇九三〇、母島港ニテ待機中ノ軍
艦並輸送船ハ目的地ニ向ツテ出航シタ。

十二月五日 船團ハ南ヘ向フ。

十二月十日 一〇四〇〇グアム島ニ上陸。

(聯合軍翻譯通譯部時事翻譯一〇號一七一一九
頁)

第一四四歩兵聯隊ノ松浦「サガヘイ」上等兵所
有ノ日記ニハ左記ノ事項ガ書カレテヤル。

一九四一年九月二十九日一召集令狀ノ受領。

十月五日一入隊。

十月八日一動員完了。

十一月二十三日一乗船。夕刻出航。朝大阪沖ニ
到着。晝間ハ航行シナカツタ。夜間出航。南下
ス、二十七日ノ朝迄南へ航行シタ。朝甲板ニ上
ツタ折小サナ島ヲ見タ。ソレハ小笠原群島ノ一
島デアツタ。

十一月二十七日一父島到着、同日〇九〇〇時出
航、晝前ニ母島ニ到着投錨。島ニハ住民少シ、
船ハ續々ト到着、灣ハ大キナ船デ一杯ダ。七隻
若シクハ八隻ノ軍艦モ投錨シテキル様デアル。
初二ハ卯月、夕月、菊月、等ト艦ニ名前ガ附イ
テ居ガ名前ハ消サレテシマツタ。此ノ輸送船ハ
船突ニヒ・H・ト書カレテアツタガソレモ又消
サレテシマツタ。母島デ馬ヲ揚陸シタ。丘ノア
タリデ馬ト犬ガ走り廻ツタ。以前ニ此處ニ來タ
人ノ話デハ女ハ美クハナイガ東京辯デ話ストノ
事デス。十二月四日迄時間ヲ費ヤス爲ニ魚釣リ
ヲシテ過シタ。ソノ間ニ馬ハ積ミ込マレタ。

再ビ暑イ處へ出航スルノデアラウト思フ、蚊帳ト辨當箱ヲ作ツテ貰ツタ。

十二月四日日本日眞ニ目的地ニ向ツテ出航スルノダ。十時頃出航、軍艦ニ護衛サレテ午前中ニ出發シタ。ソレハ「クロガメ」デアツタ。軍艦ハ凡ベテ送載機ヲ持ツテキタ。我々ガ此ノ港ニ入港シタ途端ニ二機ガ偵察ニ出掛ケルノヲ練習シテキル様ニ飛ビ立ツタ。多クノ護衛艦ガキタ。海軍ガキル限り少シモ恐レルコトハナイ。十二月六日明日グアム島GUAMヲ攻奪占領スル筈ト告ゲラレタ。航海中凡ベテノ必要ナル兵器ノ準備、例ヘバ實包一五〇發ノ様ナモノガ用意サレタ。此レデ殺ス事ガ出來ル。重クアルガモツト持ツテ行キタイ様ダ。

十二月十日一〇二〇〇我々ハ船ニ別レヲ告ゲタ。二十一日ニ此ノ船ニ乗り込ミ十日ノ朝ニ出航シタ。二十日間此ノ船ノ上テ生活シタノダ夜間明日ノ上陸ノ爲種々ナ用意ヲシタ。私ハ雜糞ニ、三食分ノ食料ト一五〇發ノ彈トヲ入レタ。出來ルダケ輕ク裝備スベキ筈タガ非常ニ重イ我々ハ暗クテヤツト見エル島ノ一地點ニ上陸シタ敵砲火

ヲ豫期シテイタガ全ク遭選シナカツタ。我々ハ、
無血上達成功シタ。

(聯合軍翻譯通譯部時事翻譯六二號一九一二〇
頁)

第一四四歩兵聯隊ノ「エブチ・シゲル」少尉ノ日記ニハ左
記ノ事項ガ書カレテアル。

一九四一年十一月二十一日一〇八〇〇乗船事務
所ヲ命令受領。門司丸ノ内部ヲ觀察ス。

十一月二十二日一部隊ニ合流スル爲ニ坂出驛へ
向フ。一九〇〇時頃坂出出航。

十一月二十三日一大阪港入港、此處デ凡ユル準
備ヲナシ終ニ目的地へ向ツテ出航充分ナル用心
ヲスベシトノ命令受領。

十一月二十七日一〇八〇〇時頃。母島着 輸送
船ハ續々ト集合。船ヨリ端艇へ乗り移ル訓練。

十一月二十八日一馬匹ノ揚陸ヲ繼續。特殊ナ器
具ノ取扱法ノ研究。

十一月二十九日一種々ノ訓練計畫ガ假想戦闘地
域ニ依リ實行セラレタ。

十二月二日一午後驟逐艦四隻入港概シテ部隊ハ
志氣旺盛デアル。